

[29] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19476>

出版情報 : Crossover. 29, pp.1-35, 2011-03-29. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :



CROSSOVER

No.29 March, 2011



九州大学大学院
比較社会文化学府

Contents

巻頭言

比文17年／九大100年	田中 良之	1
--------------------	-------------	---

新任教員紹介

日米、また東アジアとの架け橋になることを目指す	マシュー・オーガスティン	2
着任のご挨拶	山尾 大	3
いきものの進化を考える	楠見 淳子	4

情報調査室から

自己紹介	藤澤 裕子	5
------------	-------------	---

自著を語る

『骨が語る古代の家族－親族と社会－』歴史文化ライブラリー 252	田中 良之	6
--	-------------	---

紹介

金任植回顧録『森が茂れば鳥が飛んでくる－釜山の発展とともに－』	波瀾 剛	8
---------------------------------------	------------	---

比文叢書の反響

第34回日本児童文学学会奨励賞の受賞	金 成妍	9
--------------------------	------------	---

新しい出発

IT先進国スウェーデンでのディスタンス日本語教育に携わって	網野 薫菊	10
流れ流れて北の大地	山路 奈保子	12

書評

書評『青春群像 さようなら六本松 ―一九二一福高― 九六二〇〇九』	前原 茂雄	14
---	-------------	----

社会人院生コーナー

社会人大学院生として	永嶋 洋一	20
職場と大学とフィールドと。	吉村 和昭	22
「考古学徒、ふたたび」	柴畑 光博	23

学内レポート

比較社会文化学府・華東師範大学合同シンポジウム「日本と中国〈個人・社会・文化〉」を開催して	東 英寿・阿部 康久	25
---	------------------	----

海外レポート

研究会「記憶と表象から読む東アジアの20世紀」のご紹介	木下 直子	27
-----------------------------------	-------------	----

学振研究員としての研究生活

学振研究員としての研究生活	橋本 恵	29
学振研究員としての研究生活	四條 知恵	30

大学院データブック		31
-----------------	--	----

編集後記		35
------------	--	----

表紙の説明

比較社会文化学府の研究・教育のキーワードは、「異なる社会と異なる文化」、「グローバリゼーション」、「地球環境」です。表紙のデザインは、諸問題が地球規模で進行する現代社会を学際的なアプローチで研究している本学府の姿勢を象徴しています。「異なる社会と異なる文化」を繋ぐ言葉をロゼッタストーンで、「グローバリゼーション」を大陸間を渡るカモで、「地球環境」をジグソーパズルの衛星画像で表しています。
表紙デザイン：独立行政法人 国立科学博物館・非常勤研究員 林 辰弥

比文17年／九大100年

田 中 良 之

比較社会文化研究院／学府長

2011年の今年、九州大学は創立百周年を迎えた。この百年のあいだ、九大は「九州帝国大学」「国立九州大学」「国立大学法人九州大学」と名称が変遷している。そして、「九州帝国大学」以前にも「京都帝国大学福岡医科大学」の時代があったのだが、これは九大の歴史の中には入らないという考えが取られている。多くの大学では前身のまた前身を含めてできるだけ古く数えるのだが、九大の場合は生真面目ともいえるスタンスである。

九州帝国大学の発足時は医科大学と工科大学で、全くの別キャンパスであった。その後農科大学を箱崎に増設するが、いったん公道に出ないと工・農間の通行はできなかったと聞く。やや一体性に欠けると言われてきた九大の特性は設立当初からのものであったようである。

さて、比較社会文化研究院／学府は2004年に学際性・国際性・総合性をキーワードとする比較社会文化研究科として発足した。学部をもたない独立研究科は九大では二つ目であった。比文の設立の準備は「文系学際大学院構想」として、10年近い準備期間があり、当初は比較的小ぶりの組織が考えられていたが、遅遅として進まず、構想倒れとなる恐れすらあった。ところが、教養部廃止の動きで加速がつき、2004年の設置にこぎ着けたのであった。研究科の中身も「文系学際」の枠を脱して「文理学際」をも盛り込んだものとなった。「比較社会文化」の枠を抜け出してしまったのである。以来、比文は九大百年の最後の17年を共有してきたことになる。

比文を構成する学問領域は、それぞれを個別に見ると従来の学問そのものであり、新領域での教育を受けた教員が集まっているわけではない。しかし、院生たちにとっては指導教員を自分で好きに選択できるという点で、講座の枠を出ることがなかった従来の研究科とはずいぶん違ったものとなった。教員側も自分の土俵だけでは勝負ができ

ないという状況にさらされ、鍛えられてきたのではないかと思う。そのような新たな試みが比文で開始され、こんにちまで継続してきた。その結果として、これまで学界・社会に多くの人材を輩出し、研究においても一定の成果を上げ、学内外における比文のプレゼンスは確実に高まったと自負している。

しかしながら、創立当初の高揚した気分には立ち返って見た場合、どの程度達成しえたのだろうか。比文から時代を画する研究が、他を圧倒する気鋭の人材がどれほど出たのだろうか。学際といいながら、「文理学際」「文文学際」「理理学際」の実は上がったのか。この17年をかえりみて、一定の達成感とともに忸怩たる思いがあることも否定はできない。そして、内外から「比文とは何をするところなのか、よくわからない」とも言われ続けてきた。

このような認識をふまえ、この数年、将来計画を構想する中から、いくつかの研究教育の柱が考えられてきた。それは「日本学／日本研究」「文明共生」「環境変動」といったキーワードでくられるものであり、これに基づいたプロジェクトも着手されている。たとえば、九州大学の教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトに採択されている「知の中継地としての日本に関する総合的研究」と「高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究」といったものであり、比文ならではの内容となっている。また、比文教員の連携による大型科研の申請・採択も増加しつつある。さらに、22年度からは部局内でのプロジェクト支援、特色ある研究支援が開始されており、そこからも比文の特長となる研究が生まれてくることだろう。

比文は、九大百年のうち、わずか17年の歴史しか持たない。しかし、次の百年には、さらなる発展とインパクトのある組織としてあり続けることを期待したい。

日米、また東アジアとの架け橋になることを目指す

マシュー・オーガスティン

(社会構造講座)

10月1日から比文の講師として着任し、日本へ帰国することになりました。「帰国」というのは、私が日本で生まれ育ったアメリカ人であり、20年間過ごした故郷に帰ってきたからです。幼稚園から小学校まで京都にて日本の教育制度で学び、中学校から高等学校までは神戸の国際学校へ通いました。その間、アメリカとベルギーにも一年ずつ住みましたが、やはり日本語や日本に関する知識を何とか生かし、日米関係の架け橋になるような修学・就職をしたいと思うようになりました。

大学時代はプリンストン大学で政治学を専攻し、国際関係論を中心に勉強に励みました。当時は日本の政治にも関心があり、九州大学のJTW留学生プログラムを通じて、一年間法学部で様々な授業を受けました。その中で一番印象に残っているのが石川捷治教授の政治史演習で、日米安保条約の政治的解釈とその変容に関する論文を日本語で書きました。また、大学生の頃から日本を中心とした東アジア地域に興味を持つようになり、北京師範大学における夏期講習を含み、三年間中国語を勉強しました。韓国語を学び始めたのも九州大学で松原孝俊教授の授業を受けたのがきっかけで、プリンストン大学で学位取得後、ソウルにある極東問題研究所で勤めながら語学学校へ通いました。

コロンビア大学大学院では専攻を歴史学に改め、それ以降日本近現代史を専門分野にしています。ニューヨーク市に移って間もなく、2001年9月11日に同時多発テロ事件が発生しました。あまりにも衝撃的な出来事で、勉強に集中するのに苦労しましたが、その後アメリカ軍がイラクを侵攻して戦争が始まると、もう黙っていらなくなりました。反戦デモに参加し、イラク占領を批判したことは私の世界観に大きな影響を与えることになりました。当時のブッシュ政権はイラク占領が戦後の日本占領期のように、アメリカの指導の下で民主主義国家を建国すると主張していました。しかし、アメリカの占領史を研究していた私にとって、イラク占領の混乱と軍事統制は、どちらかと言うと解放後革命状態が沸騰しつつあったアメリカ軍政期の南朝鮮と比較した方が妥当であると感じました。勿論それぞれの占領には共通点と相違点があるわけですが、比較以上に重要なのはその関連性を分析する事によって、占領というものは何なのか、またアメリカによる占領の全体図が明らかになると確信しました。

博士論文の研究の為、まずはフルブライト奨学金で東

京大学社会科学研究所にて資料調査を始め、次に日本学術振興会の支援で研究を仕上げる事が出来ました。その後コロンビア大学に戻ってから、“From Empire to Nation: Repatriation, Immigration, and Citizenship in Occupied Japan, 1945-1952”というタイトルで博士論文を完成させました。博論の主旨は、第二次世界大戦直後、連合国軍による占領はどうやって日本をアジアの帝国からその植民地や統治領とはかけ離れた島国に変貌させたのかという問題を探究したものです。とりわけ占領下日本と同じく米軍統治下にあった南朝鮮や沖縄との間を往来した人々の流れに焦点を当て、占領当局が推進した民族分離に基づく引揚政策は、戦後日本の特徴となる帝国の忘却や単一民族国家論の発展に貢献したと論じています。冷戦期になると、アメリカの反共主義と日本の民族主義が混合した出入国管理制度が設定された結果、韓国や沖縄から日本へ渡ろうと試みた人々は密入国者として拘束された後、強制送還されるようになりました。戦後日本の国籍法もまた占領期の遺産であり、サンフランシスコ講和条約の規定に基づき多くの日本国籍離脱者を生み出した為、日本は少数民族の権利を保証しないという面で当時アメリカのマイノリティー問題と平行する冷戦同盟国となったことを主張しています。

今後の研究ではアメリカの占領史をもっとグローバルな視点でとらえ、戦後日本が世界とどう繋がっていたのかについて分析したいと考えています。また、教育活動に関しては、現代日本の国際史をはじめ、アジア太平洋におけるアメリカの歴史等について授業を進めるつもりです。日米だけではなく、東アジアとの架け橋になることを目指して頑張ります。



着任のご挨拶

山 尾 大

(欧米社会講座)

2010年10月1日に欧米社会講座に着任いたしました、山尾大と申します。私は滋賀県のとある寒村で生まれ、東京に住んだ半年を除いて、ずっと関西にいました。九州には採用面接の際に初めて足を踏み入れました。伊都キャンパスは市内中心部から遠くて不便、と仰る方が多いですが、大学に出てくるまでコンビニすら知らなかった私にとっては、故郷に似ていて、違和感がありません。むしろ、親近感すら覚えます。おまけに海と山が近くて、食べ物が美味しく、そして人も温かくて、とても住みやすい街だと思っています。それでいて、空港まで近いことは、嬉しい限りです。これまで5つほどの街に住みましたが、目下のところ、一番気に入っています。

少し自分の研究の話をします。私は、イラク政治と中東政治を勉強しています。政府の統治能力や政治制度の問題に加えて、1970年代以降中東で盛んにみられる現象となったイスラーム主義を掲げた社会運動・政治運動と国家の関係にも興味を持っています。

イラクに限らず中東では、権威主義的な体制が持続してきました。これに対して、不満を蓄積させた社会の側から、権威主義的体制への異議申し立ての手段として、イスラーム主義運動が盛んになってきました。もちろん、こうした運動は権威主義体制と衝突します。ここに次のような問いが生まれます。ひとつは、体制側は、政権維持のために反体制運動をどのように管理しているのだろうか。もうひとつは、権威主義体制に異議申し立てを行う運動は、どのような戦略で自らの活動を推進し、いかなる変化を遂げることになるのだろうか。

私は、こうした問題意識に基づいて、イラクの政治を見てきました。特に、2003年の米国を中心とする国際社会の介入によって崩壊したサダム・フセイン体制以降、イラク新政権を担うことになったイスラーム主義政党に着目し、それらの政党が反体制活動期に国家との関係でどのような変化を遂げ、それが新たな国家建設にいかなる影響を与えているのだろうか、という問題について、考え続けてきました。博士論文では、こうした問題の一部、すなわち、イスラーム主義政党が反体制期にどのような変化を遂げたのか、という問題について、彼らの発行していた党内規や新聞、

パンフレットなどを世界中に足を運んで集め、再構成する作業を行いました。各国に散らばった資料をつなぎ合わせ、彼らの歴史を再構築していくことは、とても難しい作業でしたが、それによってイラク国家そのものに対する認識を変える(かもしれない)事実を発見することができました。

今後は、こうした反体制期の経験・性格の変容が、新しいイラク国家の再建に、どのような影響を与えているのかという点について、勉強していこうと思っています。

私の関心は、中東の政治、とりわけイラク政治をより良く理解するにはどうすればいいか、という点にあります。学位は、「地域研究」という聞き慣れないものです。地域研究とは何かについては、終わりなき論争があると思いますが、私が考える地域研究とは、研究対象を理解するためにはどんな方法でも取り入れる、というものです。私の例でいえば、イラクを理解するためには、歴史資料も新聞も使うし、比較政治学の制度論も、国際関係の理論や社会学的な考え方も、統計も使います。人類学的な現地調査もやる。

こうして私の研究は、よくいえば広いけれど、悪く言えばまとまりがない、ノン・ディシプリンになってしまっています。でも、それでいいと思っています。年齢を重ねればこの拙い考えを改めるのかもしれませんが、今は、それがイラクや中東のより良い理解に繋がると信じてやっています。

最近、ある先生にこんなことを言われました。「着任直後の講師の重要な仕事とは、なんだか分かるか」。答えに戸惑う私に対してその先生は、「それは、一生懸命研究している姿を、研究者をめざす学生さんに見せることだ」と仰いました。学生に一番近い講師が、信念を持って真摯に研究を進めることこそが、研究の楽しさを伝えることこそが、最も重要な任務だ、というわけです。目から鱗でした。今では自分の仕事は、真剣に研究に取り組み、成果を出し続けることだと確信しています。

研究を続けてもポストに就くのが困難な時代に、経験不足の私を採用してくださり、さらに、良い研究環境を与えてくださっていることに、この上なく感謝しています。研究に対する熱意と、比較社会文化研究院に対する感謝を忘れることなく、伊都にて、精一杯研究と教育に精進したいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

いきものの進化を考える

楠 見 淳 子

(地域資料情報講座)

平成22年度10月から環境変動部門の講師に着任した楠見淳子です。九州大学で学位を取得後、JT生命誌研究館(大阪・高槻市)に移りましたが、この度、再び九大に戻ってくる機会を得ることができ、嬉しく思っています。どうぞよろしくお願いします。

専門は、分子系統、分子進化、集団遺伝学という分野で、生物の遺伝情報をもとに、その進化や多様性について研究しています。地球上の多くの生物は遺伝物質として「DNA」を利用しているので、遺伝情報というのは、具体的にはDNAの配列情報ということになります。DNAという単語はここ10年の間に急速に世間に広まり、新聞、テレビ、様々なメディアで目にする機会が増えてきました。医療や農業、犯罪捜査など身近な所でDNAの遺伝情報やそれを利用した応用技術が開発され、多くの人の関心を集めています。多少の誤解や派生的な意味が生じていることは否めませんが、DNAがそれぞれの生物の構造の設計図であり、その生命活動や様々な行動を司る基盤となっていること、また、その情報は世代を通じて受け継がれるという認識が広く世の中に浸透しつつあるのは間違いないようです。そして、DNAの配列情報には、私達が生命活動を行うのに必要な情報とともに、これまでの生物の進化の足跡も刻み込まれています。親から子にDNAの配列情報が伝えられるとき、極めてまれに間違いを起こします。この間違いは世代が進むにつれてゲノム中に蓄積していくので、異なる生物種間、そして同種の個体間であってもDNAの配列に違いが生じ、この配列の違いの量やパターンから、生物の進化の道筋、歴史を推測することができるわけです。私は、針葉樹(スギ、ヒノキ)やイチジク属植物などの樹木を材料とし、これら樹木のDNAの配列データからそれぞれの生物の進化のプロセスについて考えてきました。

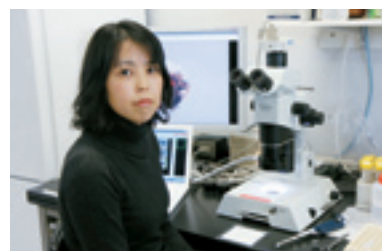
動物、植物、細菌からウイルスに至るまで、あらゆる生物のどの組織から抽出したDNAであっても、同じ物質である以上、DNA溶液はすべて同じ、無色透明な液体です。普段は、この没個性の透明な溶液を実験機に並べて、それぞれの配列を解析するための実験を重ね、データがある程度そろそろと、次はひたすらパソコンと向き合って、様々な統計処理や数値解析を繰り返します。下手をすると半年や1年、「生きた研究材料」は見ずに過ごしてしまうことになりかねません。実を言うと、私の最初の針葉樹の研究は、すでに用意された数十種類の針葉樹のDNA溶液から始まりま

した。中には聞いた事もないような樹種のDNAも含まれていましたが、その当時は研究補助員として配列データを出すだけの仕事でしたので、全く問題ありませんでした。しかし、苦勞して頂いた配列データをもとにコンピュータプログラムがはじき出した結果をみても、当然ながら、それに対する自分の解釈はなく、これではつまらないと思い、樹木を見に植物園や公園に足を運び、分子系統学を学びはじめたことが、この分野に進むきっかけとなりました。その後、多くはありませんが、研究材料を求めて採集旅行へ出掛ける機会を得ました。研究対象種の分布域をカバーするように数百個体のサンプルを採る必要があるので、採集は一苦勞ですが、それぞれの採集地で実際に生きている生物を見て考えることは、その後の研究の大事な礎であり、モチベーションを支える魅力です。



ヌマスギの群落、ミシシッピ州

今は、DNAの配列情報をはじめとするあらゆる生物情報が溢れる時代となり、生物学の様々な分野でいかに有効にこの情報を利用して研究を進めるかが課題となっています。生物多様性、進化の研究においても例外ではなく、膨大な情報の中から、種分化や適応進化を示す証拠、生物多様性の本質をいかに見いだすかを考えなければなりません。これは重要な課題ですが、それと同時に、私たちが対象とし



生命誌研究館、ラボにて

ている「生物」は、我々人間も含めた生態系の中にあることを常に心にとめ、これから出会う、生物学を志す学生みなさんとともに、研究をすすめていきたいと思っています。

自己紹介

藤澤 裕子

(情報調査室 職員)

平成22年5月より、情報調査室の職員としてお世話になっております藤澤裕子です。

周船寺に住んでおりますので、伊都キャンパスの建設が始まり次々と立派な建物ができていく様子を見ておりましたが、その頃はまさか自分が通勤することになるとは思っておりませんでした。中に入ってみて設備の新しさと充実さに驚き、こんな環境で学生生活が送れていたらもう少し真面目に学んでいたかもしれないと今更ながら思いました。

私の経歴ですが、大学では情報工学を専攻し、某電機メーカーでソフトウェア開発に携わった後、10年ほど前からは元同僚の女性数名とウェブサイトやAccess・Excelなどを使った業務システムの開発を行ってきました。長年の様々な経験を生かして、みなさんのお役に立てるように努力してまいりたいと思っております。

まず、情報調査室を管理していくうえで心掛けているのは、みなさんが研究活動に専念できるように、より快適な環境を整えていく、ということです。備品の補充・パソコンやプリンタのメンテナンス・利用者アカウントの管理・セキュリティ対策などはもちろんですが、利用するうえで不便な点・わかりにくい点をなくすという課題があると思っ

ています。少しずつではありますが、解決するために試行錯誤している状況です。情報調査室のホームページに記載するだけでは全員が目を通してきているかどうかかわからない、貼り紙はしたが他のたくさんの貼り紙に埋もれて目立たないのではないかと、それならばどうすれば最も効果的だろう、といったように。

また、みなさんからの意見を聞くことも有効だと思い、「質問・要望ノート」を置き、自由に気軽に伝えてもらう手段としています。まだ実施してから日が浅いせいか、みなさん遠慮されているのか、記入は少ないのですが、私が返事を書くのが追いつかないほど、どんどん記入していただけたらと期待しています。

他に担当する業務は、比文ホームページ・比文サーバーの管理、先生方のメールアドレスの管理、各部屋のネットワーク管理、パソコンやインターネットのトラブル対処などがあります。私にとって得意なこともあれば、経験が少なく手間取ってしまうこともあります。ひとつひとつ丁寧に確実に向き合っていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。



『骨が語る古代の家族－親族と社会－』 歴史文化ライブラリー 252

吉川弘文館(2008年3月刊行)

田 中 良 之

(基層構造講座)

本書は2008年3月に刊行されたものであり、すでに3年を経過して今更の感もあるが、改めてこの書物について紹介することにしたい。

この本は、表題を見てもおわりの通り、専門書というわけではない。出版社からは一般向けということで依頼があり、タイトルも「親族」とか「社会」とかは表に出さないでくれ、「骨が語る」という語は絶対必要で、表紙には人骨を入れてくれと注文がついたものである。



しかし、書き手にも多少の意地があるし、読者としての同業者も捨てがたい。当時の毎日新聞の取材には「一般書と専門書の中間をめざした」と答えている。その二兎を追う姿勢からか、読者の感想は二極に分かれた。「わかりやすく面白かった」という感想は専門外の方からが多く、「難しくてわかりにくい」というのは専門家からが多かった。もちろん、コアな専門家は面白がってくれたのだが、それは多数ではなかったと記憶する。

ただ、多少弁解させてもらえば、本書は「中途半端でわかりにくい本」という評価ではない。出版直後に朝日新聞の書評で取り上げられたように、それなりの評価と関

心を得たものではあるのである。

さて、私は学生時代から縄文土器の研究を行い、土器様式の空間的分布と類縁関係から当時の社会構造にアプローチできないかと苦闘してきた。ところが、医学部の助手になったこともあって人骨研究への道が開け、1984年頃からは原始古代の親族関係研究を進めてきた。具体的には古墳などの考古学的情報から被葬者の生前の世代構成を復元し、人骨歯牙の計測値を統計的に処理することによって血縁関係を推定して、親族関係を明らかにするというものである。

古墳時代の分析事例と総合的な考察の結果は『古墳時代親族構造の研究』(柏書房、1995年)として出版した。この著書では、古墳時代の親族関係が双系から父系へと3段階で変化し、大きな画期は父系化する5世紀後半であり、その要因には倭の五王の中国との交渉があり、そこで学習し摂取した国家イデオロギー・家長イデオロギーがあげられると考えた。また、古墳前期から実際の血のつながりを重視し、夫婦は同じ墓には葬られず、前半期はキョウダイを単位とすること、父系化した後も、6世紀にならないと夫婦同墓にはならず、それも家長夫妻のみであり、それは8世紀の戸籍に連続する特徴であることなどを明らかにした。その意味では本書の基礎となる書物である。

その後、古墳時代以外にも縄文時代～中世の事例を分析していく過程で、縄文土器研究と親族関係研究がつながりを見せ始め、社会像にリアリティを持てるようになった。本書は、そういった旧著刊行後の成果を加え、縄文時代から古代国家成立までの親族・家族と社会の変遷を示したものである。

本書は4章からなり、「第1章 歴史における家族・親族の意味－なぜ家族なのか－」では、研究の背景となる学説を整理し、本書の意義を述べた。すなわち、19世紀の歴史民族学から派生したエンゲルス『家族、私有財産、国家の起源』における親族・家族の歴史的意義の当否、新進化主義の社会進化モデルとの比較、およびそれらの評価を行った。その中で強調しているのは、民族誌を基礎とした社会進化モデルに考古学的事象を無批判に当てはめることは逆転した議論であり、誤った社会像へと導くことにもなりかねないということである。歴史の一回性からみても、遺跡に現れた現象こそがそこで生じた歴史事実であり、これら

のモデルの検証あるいは修正・再構築は考古学のみが行えるということである。

また、この章では日本考古学が実際に存在したであろう親族集団を、ただ「集団」という曖昧な言葉でひとくくりにし、社会人類学とも日本古代史とも互換性のない用語体系を用いてきたことを批判し、それゆえの過誤が数多くみられることも指摘している。なぜ本書が専門の考古学者から「難しくてわかりにくい」と言われることの要因の一つはここにあるのである。

「第2章 基層をなした双系社会」では、縄文時代から古墳時代前半（5世紀中頃）までの親族関係と集団の変遷を述べた。すなわち、縄文時代の前半段階は遊動的生活を送る小集団が社会単位であり、新進化主義でいうところのバンド社会にほぼ相当する。それが縄文前期になると定住化とともに双分傾向を持つ親族集団に分割される社会となり、後期になるといくつかのカテゴリーに分かれる社会となる。すなわち、半族あるいは胞族による部族社会から氏族に分割されたより典型的な部族社会へと変化したのである。

弥生時代は稲作農耕の開始と人口増加により社会が大きく変化したように見えるが、部族社会の原理によって再構成したということを明らかにし、その状態は弥生時代中期中頃まで継続することを示した。しかし、中期後半になると下の写真のような集骨が出てくる。このような集骨は系



譜関係の再確認と強調を企図したものと考えられるが、これらの人骨は一定の血縁関係を持ちながらも家族よりも広い範囲・世代の人物と考えられ、墓地内でも2～3カ所しかないため、クランから有力な出自集団が析出される過程にあると評価できよう。

そして、その中から絞込まれた男女あるいは男性一人が区画墓の中に葬られることになる。ここまできると首長制社会とっていいだろう。

この間の社会は、双系の親族関係をもちながら、階層化

を進めていった過程であり、古墳時代にも継承されることになる。そして、古墳に葬られた男女は夫婦ではなくキョウダイであり、男性のみ、女性のみ構成もある。男女比は6:4であり、相半ばしている。博物館などの展示では、古墳のいかめしさからか男王の墓という復元が多いが、実態は男女半々に近かったのであり、『魏志倭人伝』に記された「卑弥呼と男弟」とも整合する。そして、古墳時代前半期においても、家族が独立することはなく、前方後円墳においても小円墳においても、親族集団の墓と評価される事例がみられる。まさに、親族から家族が析出されていく過渡期と評価されるのである。

「第3章 父系社会の形成」では旧著をトレースしつつ、古墳時代親族関係とそれと連動して生じた葬送儀礼の変遷を述べた。また、その後の事例で明らかになった、変化の時代的ズレについても言及している。

「第4章 家族・親族からみた古代社会」は本書の考察と結論の部分である。ここでは、縄文時代の部族社会において、一般の墓地とは異なる豊富な副葬品をもつ特殊な墓地が出現し、それはいくつかの群に分かれつつ、血縁的には薄いことから、地域内の各クランから選抜された代表者たちであることを明らかにしつつ、これを階層化の現象であるという昨今の説を批判した。

弥生時代は、このような双系の部族社会を基盤としながら階層化を進めた時代である。本章では、クランから有力な出自集団が析出され、その中からさらに1人～数人の首長が選ばれていく過程を、親族関係・血縁関係を基調として示している。

そして、古墳時代に父系化する要因としては、韓半島の分析事例を加えながら、5世紀前半～後半に行われた中国南朝との外交、それによる将軍など中国の武官・文官への任官記事を参照しながら、中国の家父長イデオロギーとともに、大王および有力首長たちが任官するに際して、男性であることが必要条件であったことから父系化へとドライブがかかったと考えた。さらに、『日本書紀』允恭記に氏（ウヂ）の系譜の乱れを正したとある記事は、中国に倣った父系系譜への改編と大王家系譜への収斂を図ったものであり、全国の豪族たちが大王－畿内豪族の系譜の中に系列化され始めたかと考察した。

さて「あとがき」には、本書を「私の家族、そして生まれてくるニューカマーにも送ることをお許しいただきたい」と記したが、その孫も3歳を過ぎた。昨年生まれた二人目の孫には新著を送れず、本稿を書きながら、研究者としてこの3年を無為に過ごしたのではないかと反省するばかりである。

金任植回顧録『森が茂れば鳥が飛んでくる—釜山の発展とともに—』

波 瀾 剛

(文化構造講座)

2009年6月、本学府は韓国釜山市にある私立東義大学校人文学部と部局間交流協定を結んだ。これは同じく釜山市の釜慶大学に次いで比文にとって2番目の部局間交流先であり、今年度に入って前期は1名、後期は2名の東義大学大学院生が来日し、各々1年間特別聴講生として本学府で学んでいる。

すでに教員間の学術交流が盛んに行われていたのに続き、学生間の交流もこうして活発化するさなかの2010年4月、東義大学前理事長の回顧録が日本語で翻訳刊行された。監修は本学府の三輪宗弘教授、そして、翻訳は本学府の卒業生であり、現在は東義大学教員のお二方、権赫建教授(日語日文学科)と金有暉講師(教養教育学部)が担当している。比文と縁のある人々の絆によって、ふだんはなかなか知ることの出来ない韓国の現代史、そして玄界灘の向かい側にある釜山の地域史に接する機会に恵まれたことは喜ばしいことである。

構成は以下に挙げる7部。「第1部 生い立ちと日本留学」、「第2部 教育に注いだ情熱」、「第3部 波瀾の政治生活18年」、「第4部 学校法人東義学園の構築」、「第5部 明日を拓く人々」、「第6部 森が茂れば鳥が飛んでくる」、「第7部 補論「私の一家」」。

1923年うまれの著者が留学のために日本に渡ったのは15歳のとき。1937年に滋賀農業学校に進学した後、東京電気通信技術専門学校高等科に編入。卒業後は東京の会社を二つ経て三洋電気に就職し、工場が長野県上田市に疎開するのにもない、著者金任植氏も上田市に移り、そこで1945年8月を迎えている。この間の苦労が第1部で語られている。

第2部は1945年10月に帰国してから南鮮電気株式会社(株)の技師となるも科学(理科)教師への転身する経緯や、1953年に31歳の若さで中学教頭になってからの日々が綴られている。この間、釜山は朝鮮戦争の混乱に見舞われていて、まさに激動のさなかにあったことがうかがえる。

「吸殻爺」と渾名されるほどに学校内を見て回り現場に重きを置く教育への情熱は地域社会にも注がれ、地域住民の生活向上に奔走する姿からやがて「西面の大統領」と呼ばれるようになる。こうした姿勢が周囲の政界進出を促す契機となったと語るように、教員生活18年の後、1963年からは政治家としての18年の人生が始まる。

第3部は国会議員としての軌跡をたどっている。民主共和党員として朴正熙政権下で国会財務委員長を務め、付加価値税制の導入に腐心したことなどが回想されている。その間、著者は政治家であるとともに学校経営者でもあった。1966年

に学校法人東義学園を創設し理事長に就任、国家の発展には人材開発が肝要であるという観点から、東義中学校と東義工業高等学校を設立。さらに1973年には東義専門学校(東義工業大学の前身)、1977年には慶東工業専門学校を開校。同校が2年後の1979年に4年制大学へと昇格し、東義大学が誕生した。第4部は学校経営者として東義大学を開校するまでの日々を回想している。

第5部では東義大学発足後10年の歴史が顧みられている。この10年は総合大学へと成長する過程である一方、朴正熙大統領射殺事件に始まり、「5・3事態」で終わる著者にとって苦難の時代でもあった。東義大学でも他の大学と同様学生運動が激化するなか、1989年5月3日に警察官7名が死亡する事態が起きている。私が大学2年生になってキャンパス生活を満喫していた時期の出来事だと知り、いまさらながら隣国における世相の移り変わりに思いが至った。

そして、第6部は90年代から現在までの東義大学改革、第7部は金海金氏金城君派の族譜に関する内容。監修者あとがきにもあるように、このあたりからはかなり立ち入った事柄が続いている。しかし、韓国における「現代」と「伝統」との密接な関係を知ることでもできる興味深い部分だと思う。

随所に刊行直前逝去された著者の遺志を感じる一冊。



(花書院、2010年4月刊行、266頁、3,000円)

第34回日本児童文学学会奨励賞の受賞

金 成 妍

(立命館アジア太平洋大学・久留米大学非常勤講師)

2010年3月10日、博士論文の「越境する文学」が 比較社会文化叢書として刊行されました。



嬉しい半面、クロスオーバーの自著紹介コーナーに自著について書かなければならないということが私にとっては今年最大の重荷でした。正直なところ、博士論文を仕上げてしまった後は極力この論文をめくらないようにして来ました。私の20代を丸呑みしたようなこの一冊をめくると、当時のつらい思いや様々な出来事が思い出されるという理由もありましたが、それよりも一番書きたかったことを書けず逃げるように閉じてしまったことへの後ろめたさが大きいからです。

徹底的に資料を調べて、資料についていけば見えてくるものがあると思いました。資料が語ってくれる物語が、きっとあると思いました。ところが、その最後の物語に耳を傾け、書き上げる集中力と実力が私にはとんでもないくらい

足りませんでした。いい訳ではありますが、とりあえず閉じてしまわないと息が出来ない状態でした。

それを閉じて2年が経ちました。自由に息が出来るようになって社会人になった気取りで大いに楽しみました。今日も書けなかったと涙を流しながら布団に入らなくてもいい生活、週末は図書館に行かなくてもいい生活、10分でも時間がとれたら集めた古い資料をルーペを使って一文字ずつ判読しなくてもいい生活は本当に楽でした。

今年の9月、一本の電話がありました。日本児童文学学会からの電話で、私の「越境する文学」が「第34回日本児童文学学会奨励賞」を受賞することになったという知らせでした。信じられないという気持ちでした。

11月13日、大阪の梅花女子大学で授賞式がありました。外国人としては初めての受賞でした。賞状を受け取った瞬間、言葉ではなく体ではっきりと分かりました。書けなかった続きを、本当に書きたかった物語を今度こそ書きなさいと、奨励してくださる賞なんだということ。

韓国にいる家族は大喜びでした。日本語を読めない家族は未だに私がどういう内容のものを書いたのか分かりません。ただただうちの孫が、うちの娘が、うちの妹が世界一立派なものを書いたとばかり信じ込んでいます。部屋にもリビングにも本を飾っており、私の親は知り合いに自慢するためにはしばらく持ち歩いたくらいです。

今回の受賞は私には勇気を、そして家族には無限の喜びを与えてくれました。いつかは世界一立派なものが書ける孫に娘に妹になるため頑張ります。



IT先進国スウェーデンでのディスタンス日本語教育に携わって

網 野 薫 菊

(Dalarna University, Sweden)

月日が経つのは早いもので、比文を離れて1年半が経った。修了時にも「博士論文を書き終えて」という題でクロスオーバーに寄稿させていただいたのだが、その中で「修士、博士を通じて得た力を基として、国外のどこででもやっていける自信を得た」というような不遜な内容のことを書いたことを思い出す。その後、中国・マレーシアで日本語教育に携わった後、今現在はスウェーデンのダーラナ大学でSenior Lecturerとして日本語教育に携わっている。

ダーラナはスウェーデンのストックホルムから北西に200km、およそ電車で2時間半のところにある地域で、ダーラナ大学のあるファールンはその県庁所在地である。

県庁所在地といっても福岡のような大きな街ではなく、街のメインストリートは15平方キロメートルといったところで、そこから離れるとどこかな森林地帯が広がっており、しばらくここで落ち着いた生活ができていると思っている。

いろいろな国の文化や風習などを体験できることがこの日本語教師という仕事の醍醐味ではないかと思うが、スウェーデンという国は今まで住んだどの国とも違うと思われることが多い。

外側から言えば、アメリカや、また大連やクアラルンプールなど成長著しいアジアの新興国に必ずあるとっていい華やかなショッピングセンター、娯楽施設、大小さまざまなレストラン、きらびやかな装飾などはこの街にはない。

また所得税(32%)と同様に消費税も高い(25%)に人々があまり物を買わず、今あるものを大切に使用しており、大量消費、大量破棄とは無縁である。その一方で、高齢者や障害者への福祉やバリアフリーの徹底、子供を産んで育てること、忙しすぎない生活など人間らしく生きる最低限の条件は、そうやって支払った税金により、皆に保障されていることが見てとれ、アメリカとはまた違った形の先進国を見た気がする。

さらにダーラナ大学への雇用についてであるが、Senior Lecturerという職位に適格かどうか、外部のアセスメント団体が審査するために、着任してしばらくして細かい証明書の提示や、かなり昔の研究の内容などいろいろな質問をされ、なんだか不安になったりしたものである。つまり公平性ということが徹底されているのであろうか。

私自身の仕事内容としてはインターネットを通して日本語授業を行うというディスタンス授業などに従事している。最初はオンラインの授業ということが可能なのか半信半疑



中央奥はFaculty of Humanities and Media Studies、日本語科 Head and ChiefのHerbert先生、その右横筆者。同僚の先生方とMeeting中

だったが、Adobe Connect を使用して、かなり対面型の授業に近いものができるようになってきている。カメラとマイクを用いて、参加している学生全員の顔が見え、声が聞こえる。またパワーポイントを見せながら、それに黒板のように書き込みする、またウェブ資料を見せる、学生を指名する、学生が手を挙げて答える、少人数でのグループワーク、同時チャットといったことまで可能である。先生の中には、対面型より学生の表情がむしろ見えやすいという人もいる。そういった実際の授業に加え、教材の配布、宿題やレポートの告知、提出、返却などもインターネット上でスムーズに行われるようになっており、宿題を出した、出していないといった問答も回避できる。

もちろんディスタンス教育ならではの弱点もあるだろうが、こういった教育形態は将来的に必要とされると思う。ディスタンス教育では、学生の物理的距離に縛られないために、学生の中にはフィンランドなど他国(2011年度からはEU以外にも対象を拡大)から授業を受けている人もおり、ディスタンス教育においてはもはや国境はない。国境や物理的距離にしばられずに、誰でも受けたい教育を受けることができるといった状況を現実のものにできるのが、ディスタンス教育の最大の利点なのだろう。スウェーデンの一地方に住みながら、漢字、作文、マンガ等の授業を受け、スシを食べ合気道を習う学生を見ていると、日本に行かずに日本語環境に浸ることが一個人の裁量でいかようにも可能になっており、個人の意思と自由の実現ということをつ

くづく感じる次第である。

また私個人の研究面でも、Research Proposalを学内で申し込むと、研究費、学会費用などのサポートもあることがわかり、久々に新しい研究を想起中である。

最近つくづく思うことは、ディスタンス教育へと形が変わっても、その前に大連とクアラルンプールで日本語を教えた教育経験がやはり生きているということである。

冒頭でも述べたように、前々回のクロスオーバーに「国内で必要とされないのであれば、もっと広い世界、そして地球の果てでもやっていける」という偉そうなことを書いた。実際にはこの1年半大変だった。アジアの新興国での経験は、面白い人に会える機会であると同時に、研究一辺倒の価値観からの脱皮を強いられる経験でもあった。

博士号取得までは日本語学校などで非常勤もせず、ずっと研究だけやってきたのだが、取得後ひさびさに日本語教育現場に戻ると、実務能力を第一に考えられる職場でなかなか研究そのものがあまり評価されないために、自分のやってきたことの意味を問い、そういった意味で辛いこともあった。

しかしそういった研究センターでやってきたというプライドが傷つけられることがあっても、アジアでの実務から学んだことは大きいと思う。入門から中上級と一通り経験し、たいていのレベルになんとか対応できる気がする。また現場の日本語教師が日々どのように真摯に教育に携わり、大変な思いをしているのか知るのも、「研究する者が優れている」といった価値観を変えさせてくれたと思う。さらに学生の国籍は違っても、日本語の中で同じように誤用されやすいものや、理解されにくいものが、添削や学生とのやりとりで明らかになってくる。そういった蓄積は今後も教育上役に立ってくれるだろうし、日本語が外国語を話す人間

にどのように認識されているのか、彼らにとって日本語のどんなところが難しく、また面白いのか知ることが、また新たな研究のヒントになってくれる気がする。そして机上の論をどのように現実的な価値をもつテーマにしていくのか、教育に携わることでだんだん見えてくる気もする。

言語は机の上でなく、人と人の間に存在するのである。

ヨーロッパで英気を養い、さらに成長することができればと思っている。



ファールンの中心部にあるクリスティーネ教会の前で

流れ流れて北の大地

山 路 奈 保 子

(室蘭工業大学国際交流センター)

この4月に北海道の室蘭工業大学に日本語教員として着任しました。いきなりですが、みなさん「寒冷地手当」ってご存知ですか？この原稿を書いている11月、ついにソレが出ました。ばかでかいストーブが際限なくガブ飲みする灯油の購入費用に充てるために支給されるのが寒冷地手当。11月から3月まで支給されます。支給額は単身者で12,860円。しかし、おそらくそれは「焼け石に水」。はじめて過ごす北海道の冬、11月にしてすでに福岡なら真冬の寒さに震えつつ、いったいどこまで寒くなるんだろうと恐れながらも、実はちょっと楽しみにしている今日この頃です。

「室蘭は北海道でも寒くないし雪もたいして降らない」。札幌出身の友人のそんな言葉を真に受けていたわたしは、今年1月、東室蘭駅前の白一色の風景を前に呆然と立ち尽くしていました。室蘭工業大学国際交流センターの日本語教員に応募した結果、面接に呼ばれ、喜び勇んでやって来たはいいけれども、駅前はいったん解けた雪が固まって一面スケートリンク状態、そーっと踏み出した足がツルリと滑り一歩も歩くことができません。それでも面接の前になんとか腹ごしらえをしなければ、と思って見渡してみても、立派な駅舎のわりに立ち食いそばとてなく、駅の周りには古ぼけた飲み屋の看板がちらほら見えるばかり。仕方がないので、繁華街に出てデパートのレストランフロアでも覗いてみよう、と思ってタクシーに乗り、「あのーすみません、デパートかなんかありますか？」と聞いたらば、運転手さん、「デパート…」とつぶやいてしばし絶句した後、「ひとつだけ、あるんだけどねえ…もう閉店すんだよね…閉店セールやってっから、もう何にも残ってないと思うよお…」。結局、運転手さんが「あそこなら何かあるよ…」と連れて行ってくれたショッピングセンターのカフェで、駐車場を覆う一面の雪と、まばらに行きかうジャージ姿の地元民を眺めつつ、「ここに住むのは無理。ぜったい無理」とつぶやいた私でした。

それでも今ここにいるのは、もちろん、面接に受かったからですが、その帰り、千歳空港へ向かう電車の窓から見た牧場の、雪で覆われた真っ白い大地に青い空のまぶしいコントラスト、その中のんびり立って尻尾をゆらしているサラブレッド——という風景に、ここで暮らしてみても悪くはないかもしれない、と思い直したからでもあります。

福岡で生まれて大学は京都へ、東京の会社で働いた後に

トルコの大学で日本語を教え、その後福岡に戻って比文の大学院生となり、そのまま福岡のあちこちの大学で非常勤講師をしつつ専任教員の職を探していました。老親のことを思うと、できることなら福岡で、だめでもせめて関西までの、すぐ帰って来られる範囲で…と考え、東北や北海道の大学にはそれまで応募したことはありませんでした。ですから、室蘭工業大学の日本語教員募集を知ったときも、はじめは「北海道か、それはちょっとなあ…」と思ったのですが、非常勤で九工大や高専で教えていて、工学専門の学生は私にとっては教えやすいという印象があったので、国立で工業大学ならいいかもしれない、と思い直して応募したのでした。老親も嘆くかと思いきや「パスポートいらないところならいいよ、室蘭くらいならどうせ飛行機に乗ればすぐだし」とあっさり賛成してくれました。確かに、今の住居から実家までは5時間ほどで帰ることができますから、本州の中途半端な山奥とかに就職するよりはるかに親孝行かもしれません。親いわく、「あんたは北へ北へと向かう運命なのね」。確かに、福岡にいちど戻った以外は、トルコも含め、どんどん緯度が上がっています。できれば、これ以上北には行きたくないとは思っていますが。

さて、気候風土の異なる北の暮らし、「寒冷地手当」以外にも耳慣れない言葉や見慣れないものはたくさんあります。まずは「ナツグツ」。面接のとき、現在の上司である国際交流センター長が、わたしの足元を眺めつつ「それはナツグツですか？」と言ったのです。一瞬何のことかと思ったのですが、続けて「われわれはこの季節フユグツをはくのですよ、そうしないと歩けませんから」と言ったので、「ナツグツ」＝「夏靴」と理解したのでした。冬、凍った道はふつうの靴では歩けません。道民が冬にはく靴の底は、特殊な素材でできていて、特殊な形状の溝が入っています。それを「冬靴」と呼ぶのは知っていましたが、それ以外の靴を「夏靴」と称するとは知りませんでした。

次に「ミズヌキ」。教職員宿舎に引っ越したとき、水道の元栓をひねっても水が出ないので不思議に思い、まだ引越しのあいさつもしないうちから一階の住人に尋ねてみたところ、「それぞれの玄関横にミズヌキの装置があるからそのスイッチを押すんですよ」と。よくわからないながらも玄関横にある何かの装置のスイッチを押すと水が出てきました。ミズヌキ、すなわち水抜きは厳冬期に水道管の破裂を防ぐために中の水を抜いて屋内の水道管を完全に空にす

るというもので、冬に長期間家を空ける場合は必ずやっておかないと、中の水が凍結してえらいことになる、そうです。かつては家中の蛇口という蛇口をいっばいに開けた状態で一階まで駆け下りて元栓を閉める、という方法だったけれども、今はそのミズヌキ装置を使うので下まで降りる必要はなくなったということです。5階の住民（しかもエレベーターがない）の私にはミズヌキ装置さまざまです。



愛用のブーツを靴の修理屋さんへ持って行って「フググツにしてください」と言ったらこうなりました

室蘭工業大学国際交流センターにはセンター長以下、わたしを含めて専任教員2名、非常勤教員1名、専任の事務スタッフが3名、非常勤の事務スタッフが2名います。この陣容で留学生100名あまり、プラス海外留学や海外研修に行きたい日本人学生のお世話、および海外の大学・研究機関との協定に関わる業務などを行っています。こちらから学生を送る方も向こうから来る学生を迎える方も絶え間なくありますから、年中でんやわんやしています。しかし、両方の面倒をみているおかげで留学生関連の行事にも日本人学生やほかの教員の協力が得やすく、国際交流「センター」としての機能を十二分に果たしていると思います。教員と事務スタッフの連携がきちんとできていてチームワークもよく、気持ちよく働ける職場です。国際交流センターのある一角は昼前にときどき大学とは思えない魅惑的な香りが漂い、周辺の教室で授業を受ける学生をおおいに悩ませていますが、それはセンターのスタッフが寄り集まり、「昼食会」と称して、ときには留学生の手も借り、あるときはタイ料理、あるときは韓国料理、またあるときはラオス料理などを調理してみんなで仲良く食べているからです。

海外の研究機関との学術交流協定について言うと、私は着任1年目にしてさっそく新たな協定を締結することに成功しました。協定校はすでに30ほどあったのですが、台湾には一校もなかったもので、台湾の大葉大学の日本語教員で比文の先輩である黄英哲先生に「うちと提携しませんか」と持ちかけたところ「それはいい、ぜひ」ということになり、夏にセンター長とともに台湾を訪れて協議・視察をし、めでたく協定締結にこぎつけました。大学院の人脈とはじつにありがたいものです。



大葉大学にて、研究室訪問
真ん中が筆者、左から3番目が黄英哲先生

気候のことや地方都市の不便さも含め、いろいろとたいへんなこともあります。結局わたしは最も自分にあった職場にめぐり合うことができたのだと思います。難点は工業大学ゆえ学生のやっていることが私にはちっとも理解できないということです。それでも奨学生選考のために学生の研究内容のプレゼンを聞くなどという恐ろしい任務が容赦なくめぐってきます。ひととおりプレゼンを聞いた後でこっそりセンター長に「あのお、『ポリマー』って何ですか？」と聞いて「そこから説明が必要ですか?!」とあきれられる有様です。多少「わかっているふり」くらいはできるよう勉強しなければなりません。

職場に慣れるにしたがって、教育・研究以外の、大学の運営に関わる業務が雪だるま式に増えていくものと思われ、今以上に忙しくなっていくでしょうけれども、北海道の蟹・鮭・ホタテ・アスパラ・じゃがいも・とうもろこしなどをエネルギー源に、なんとか乗り切っていこうと思います。

書評『青春群像 さようなら六本松 —— 一九二一福高 - 九大二〇〇九』

前 原 茂 雄

(比較社会文化研究院学術研究員)

はじめに

本書は、2009年3月をもって閉校した九州大学六本松キャンパスをめぐる歴史と人々の回想をまとめたものである。旧制福岡高等学校時代から九州大学第一分校、教養部、その解体と新体制への移行。そして、新キャンパスへの移転まで。大正10年(1921)より88年間に及ぶ歴史が、様々な立場の人々からの幅広い視点で描かれており、通常の大学沿革史とは大きく異なるユニークな内容となっている。教育史・世相史・社会運動史・地域史など、様々な切り口を内含する豊かな内容は読んでいて飽きることがない。

キャンパス移転が差し迫った中での準備期間は短く、また、編集体制は必ずしも万全でなかったと仄聞する。しかし、そうした厳しい状況下でありながら、153の寄稿・インタビュー、上下2段組約500頁の大著を完成させたことはまさしく瞠目すべき偉業である。まず何よりも執筆・編集に関わった人々に、心よりの敬意を表したい。

私的なことながら、評者は大学院比較社会文化研究科の出身であり、大学院進学後から現在に至るまで、15年近くにわたって六本松地区の住民でもある。キャンパス南東にあった亭々舎から50mも離れていない浪人谷の一角に住む。同窓の者として、また地域住民としても、本書を興味深く読むことができた。以下、紹介と若干の感想を記したい。

本書の構成

本書は、それぞれの項目に分類されながら、多数の証言・寄稿によって構成されている。多くの場合、冒頭に現役教職員や研究者によって概観が記され、その後に証言や寄稿が連なるといったスタイルを採用している。座談会もある。その間、貴重な古写真も随所に挿入され、多くの文字情報とともに、往時を視覚的に復元する効果を与えている。

本書の大まかな構成を掲げる。

はじめに

巻頭写真

第1章 旧制福岡高等学校の時代

第2章 新制九州大学、第一分校から教養部

第3章 記憶に残るできごと

第4章 教養部の解体から新体制の発足

第5章 旧教職員たちの回想

第6章 校内の施設環境

第7章 大学があった六本松という町

第8章 現教職員から

第9章 新しい出発

年表・六本松キャンパス概略史・職員変遷表稿

あとがき

膨大な内容を逐一紹介することはできないが、評者がとくに重要だと思われる点についてのみ、以下、いくつかの証言の断片を紡ぎながら掲げてみたい。いささか冗長となるが、評者が拙い文章を記すよりも、内容をより確実に紹介できると思われる。

旧制福岡高等学校時代

まず、本書の白眉ともいえるのが、旧制福岡高等学校時代の部分である。何といっても寮生たちの豪快な逸話の数々が披露され、痛快極まりない。九州大学をめぐる沿革史の中でもあまりふれられてこなかった前史に該当する。様々な記憶の中に留められていた回想が本書に収録されることによって、「マントを着て下駄を履いて闊歩」していた(128、以下、数字は該当頁数を示す)往時の闊達な高校生の生活を鮮やかに蘇えらせた。

「バカになれ、既成概念をすべて疑え」(85)という教育は、白線帽の高校生たちの自由な学問・人格形成の基礎となった。教職員への尊敬や結び付きも強かった。文芸活動も盛んだった。中には「昼から泡盛飲んで酔っぱらって、授業があるのに運動場の真ん中でひとり『あゝ玄海のお』と歌っている豪傑もいた」(17)り、「ガマの油売りをやったり、中洲の易者のもとに毎日行って手相見を覚えたり」(85)するなど、自由すぎる生徒もいた。寮生活は厳しいながらも楽しく、強烈な記憶が多いようで、寄稿やインタビューにおいて話題が集中している。「寮は棟が異なると交流が少なかった」(75)という証言もあるが、「上級生のストーム、寮歌練習」、陸軍墓地などへの「試肝会」、「読書会」(123)などにより、結び付きはきわめて強固だった。寮祭では、競技の他に「高校生が園児と一緒に遊ぶ」(84)といった牧歌的な場面も見られた。寮の2階の窓から行う小便は「寮雨」、空腹時の炊事場荒らしは「まかない征伐」(122)など、独特のユニークな用語も枚挙にいとまがない。

一方、「高等学校ではみな苗字しか呼ばない」「下の名前

を呼ぶ場合は同姓のものがいるときだけ」(64)という普段の何気ない雰囲気が記録されているのも貴重である。自宅生の何気ない回想も注目される。友達と連れ立って歩く時は、「いつもいっしょ、電車はあったけど六本松が終点。樋井川沿い、大濠公園、ずーっとしゃべっていた」(17)、「まっすぐ帰らんで」、わざと寄り道し、他愛のない話を「結局別れたくないから話す」(88)という証言もじつに旧制高校時代のおおらかな雰囲気を活写している。本書の優れた点は、制度的な沿革や特別な事件だけでなく、こうした何気ない日常のひとこまを記録していることにある。

さて、本書の特筆すべき意義は、南方特別留学生の実態を丁寧に記録したことであろう。松永典子氏による丁寧な解説(91)もさることながら、当事者であった留学生の手紙やインタビュー、受け入れた側の人々の寄稿に成功していることはきわめて重要な成果である。故国の期待を負いつつ来日しながらも、敗色濃厚な日本の地にあって勉学に勤しむことの厳しさが描かれる。僅か4ヶ月の福岡滞在ながら、福岡の空襲に遭遇した。焼夷弾が投下される中、港に避難し、「海に潜って、(防波堤の)壁にある鉄輪につかまって、時々、海に入ったり、首だけを出したりしました」(109)という証言は生々しい。そうした状況下でありながらも、灯火管制の中、留学生がいる「南寮からバイオリンの練習が聞こえ」、遊びに行き、「留学生の伴奏でシューベルトのアベマリアを歌った」こともあったという(116)。留学生は短い期間の滞在であっても、他の寮生たちとの少なからぬ交流があった。制度的な記述からだけでは決して明らかにすることのできない側面であろう。

戦争前後の状況

本書では、戦争そのものに関する記載は多くない。この点、当事者の証言よりも、服部英雄氏による概説の記述が前面に出る。少し早く、大正14年(1925)の蜷川新の講演とそれへの生徒たちの反発、学校側からの処分に至る一連の問題(蜷川事件)を丁寧に整理している。また、昭和初期の思想状況については、「生徒課日報」の引用が労をいとわず行われており、興味深い。報国団の結成や出征・勤労動員などについても概観がなされる。しかし、かえてこの時期の生徒たちの証言が極端に少ないことが気にかかる。戦前は、「左翼系の本はふつう入手できないはず。でも古本屋と仲良くなると、裏から持ってきてくれる。棚に並べていると没収」「どこの古本屋でも隠しているけど持ってはいた」(16)などの貴重な証言もあるが、思想問題については踏み込んだ肉声はあまり多くない。むしろ、玉音放送など、終戦に関する部分(77)になると証言が復活する。また、終戦の日、寮にビールが振舞われたという逸話も興味深い(77)。振舞った主体を当時の折竹校長だと断定する服部氏の論法にはいささか飛躍があるが、可能性は高いだろう。

この時期の証言や寄稿には、経済的な困難や食糧難の間

題が前面に出る。「あまりにもひもじくて、イヌやネコを食べていました。ネコの皮は張って干していました」(118)という。犬を食べた話(115)は複数の証言を得て、より具体的になる。「赤犬狩り」と称して寮の裏庭で撲殺し、解剖して食肉とした(130)。これは第一分校であった六本松だけではなく、久留米の第二分校でも「赤イヌがうまいということで、医学部希望の友人がこれを料理」し、焼きにしたという(163)。戦後にも「校舎と校舎の間の草むらから蛇などが『こんにちば』と顔を出す」(336)状態であったから、蛇や鳩、鳥を食べたという話も納得できる(130)。酒に関しては、「医者の子息が多かった為、家からエチルアルコールを盗んで来て、皆で分け飲み、酔うために寮の廊下を走っていた」(130)という涙ぐましい逸話も語られる。経済的にも苦しかった。シェイクスピア全集を古書店に売ったものの、「福高の生徒さんが帰省する汽車賃がないからと持ってきたが、必ず買い戻すから売らないでくれ」と頼まれた(140)とのことだったという。

新制九州大学へ

本書では新制九州大学への転換について、ほとんどの部分を女子学生の視点で描いている。これもきわめて特長なこと、お定まりの学制改革史を相対化することに成功している。「パンカラ気風の残っていた圧倒的多数の男子学生に囲まれ、女子学生は一致団結、協力して助け合うしかなかった」(153)中にあって、男子学生を意識し、意識されながらも(147)、女子更衣室を獲得していく様子(148)も語られる。また、「教養部に長居する学生が結構いました。まあ、牢名主のように。年長の余裕もあり、女子学生の面倒見」がよかった学生もいた(149)。これらの証言は、黎明期の男女同学の悩ましい雰囲気をよく伝えている。

旧制高等学校出身者と新制大学からの学生との意識的な差異について、証言が少ないのが残念である。しかし、「大人度に差が大きかったのでとても気遣って下さいました」(151)というのが、多くの学生たちの認識であったのであろう。この後少し経ち、昭和30年代に入ると、旧制高等学校時代の木造本館校舎も、「こうなったら、シロアリでも飼いますか」(335)という状況になり、少しずつ旧制高等学校時代の雰囲気が色褪せたものになってきていた。

激化する大学紛争の渦中において

九州大学教養部は西日本の大学紛争の拠点として、きわめて長期かつ大規模な紛争が繰り広げられた。本書では、学生、教職員、事務職員、近隣住民、それぞれの立場から大学紛争を描く。この部分に関する概説は少ない。もとより、当事者たちの証言・寄稿が何より雄弁だからである。

とりわけ、学生側からの視点で書かれた中村禎里氏(179)と野林正路氏(184)の寄稿は、本書における特筆すべき文章であろう。両氏とも、放學処分になったという得がたい

経験をもつ。中村氏の文章は1950・51年における学生ストをめぐる経緯が解釈をあまり加えない形で詳細に書かれており、資料的価値がきわめて高い。学生による決議がなされるまでの苦難の経緯と警察による妨害・逮捕、逮捕者の釈放までが時系列上に整然と叙述されている。中村氏の文体と筆力の強さ、何よりも鬼気迫る事実の重みにより、臨場感を強く思わせる。本書の中でも白眉の文章といえよう。学外の信頼おける人物が行動隊長に指名されていたが、「学生大会の会場には入らないのだから、彼が行動隊長であることは自治の侵害にはならない」(182)という記載をあえて特記している部分には、現在においても論理的な正当性を明確にしたいとする中村氏の強い信念がうかがわれた。

また、野林正路氏の証言もきわめて重要である。登場する人物の名前が、実名によく似た仮名で記されていることに注意する必要があるが、ひとりの文芸青年がどのように学生運動に関わり、その後思想的進化を遂げていったかが、現在の心境に至るまで如実に描かれている。

但し、別の人物は一方で、現在は「まっとうな暮らしをしている」が、「軌道修正したときが、六本松の青春との遅すぎる訣別」(256)だったと言葉を寄せる。「速やかに迷夢から醒めて」「真人間になる」ことを求めた福岡県警の警告文(225)も生々しい。

ここで重要なことは、学生運動に抗していた学生たちの証言も併せて記録していることだ。スト中の第三分校にあって、ただひとり、学年末試験を受験していた生徒の新聞記事が収載されている(178)。「僕の受験についてはいろいろいつてくるが、いう人に自由があり信念があるように、僕にも自由と信念があるから、一さいの干渉を排除して敢然受験した」とある。また、紛争の名残が感じられた1970年代後半にあっても、「私の中に、むずがゆく、また確かに蘇ってくる、ひたすら一人でいられた幸福感のようなものに嘘はなかった」(263)とする回想がある。

その一方、教職員側の証言には苦悩が滲み出ている。学生側との度重なる団体交渉、会場を次々と移して開催された教授会、学生への対応についての内部対立、そして、学内封鎖による研究室の荒廃。それらが生々しく語られる。「苦痛に満ちた悪戦苦闘の日々」(329)、「長い全く不毛な期間」(338)、「学園紛争の頃の教養部の思いでは、辛く悲しいものであった」(323)との評価が多くを占める。

とはいえ、周辺住民たちは学生に対しておおむね好意的だった。近隣の商店では、火炎瓶に使用される可能性があるため「ブラッシー」の大学納入には数の確認が義務付けられていたともするが(425)、「町の人達の気持ちは『学生は若いし、頑張り』というものだった」(426)という。教養部前の屋台のラーメン屋が後に語ったという、「あの頃は学生さんでしたが、今は学生ですよ」(210)という発言は象徴的であろう。

『政治の季節』などというわかりやすい物語の中で振り

返れば酒のつまみぐらいにはなるだろう。私はそのような感傷の共同体に参加することは拒否する」(314)と、若い世代は言葉を寄せるが、本書の中に「酒のつまみ」で済ませるような文章はなく、そのような共同体の住人を見出だすことはできない。かえって、若い世代の中には、学生に「今戻れるとしたら」「何か全力をつくして馬鹿なことをやってみたい」(312)といった質の異なる感傷が芽生えていた。

教養部の解体と新体制への移行

当時の担当者たちによる座談会はきわめて興味深いものである(285)。新体制への移行に関する内部の対立と調整、担当官庁への交渉過程、全てが生々しく語られる。新体制への移行がどのような試行錯誤をたどるのかについては、『比文創立十周年記念文集』(2004年)などにも詳しい。但し、『記念文集』ではふれられなかったことが、その後数年を経て、まことに多く語られている。変革の経緯を逐一記録すること自体が歴史的な使命である、と自覚的に捉えたからであろう。その結果、大学史を語る際の貴重な証言がまたひとつ蓄積されることになった。

一方、長く続いた教養部の解体と新体制への移行は、機構の変革という以上の意味を与えていた。「教室事務が廃止されて、教職員の距離が遠くなりましたね」(377)、「日々知らぬ顔が増えてゆき以前のようなキャンパス全体の持つ、ごたまぜながらの一体感というものが自分の中からも消えていった」(440)との証言もある。確かに、大学院が設置されることで年長の院生や留学生が増え、従来の主たる「住人」であった20歳前後の学生たちとの混在は、じつに奇妙な光景をキャンパスに生み出していた。それをおもしろいと考え人もいる一方、長く六本松に関わってきた人々にとっては、「ごたまぜながらの一体感」が「本当のごたまぜ」になってしまった寂しさがあったのだろう。

その他

大きな事件についての証言や記述が連なる一方で、断片的ながら、本書には、現在は見ることができない往時のキャンパスの豊かな自然や、学生たちとのふれあいも記録されている。「キャンパスの北西には見上げる程高い大輪のイバラの生垣」(155)があり、戦後すぐには「陸軍墓地へ向かう道すがらの校庭の塀に白バラ」(139)があった。「寮のまわりには四つ葉のクローバーが多かった」といい、学生は摘み採りに興じていた。「五つ葉や六つ葉」もあったという(172)。寮時代が終わった後も「運動場で一面のクローバーに囲まれてお弁当を食べていた」(156)り、「昼休みには車座に坐った学生がロシア民謡」を歌っていた(155)。何気ない風景が、学生たちの心を穏やかなものにさせていた。グラウンドや寮の一部はその後テニスコートや駐車場へと変貌を遂げたが、範囲を小さくしながらも、クローバーの群生は片隅に残っている。

一方、亦楽斎には教職員の子どものための施設「ひまわり保育所」ができた(374)。教職員組合立であったが、産後6週間から託児することができ、女性職員の早期職場復帰が可能となった。ビア・パーティーやクリスマス・パーティーもあった。「スカウトされた先生がサンタさん」だったという(376)。「ちっちゃい子がキャンパス内をよく散歩していました。カルガモみたいだね」(375)。六本松キャンパスにはかわいい子どもたちの声も響いていた。

本書を読んで

本書を通読してまず感じることは、大学紛争時の事象が強調されている点であろう。教職員や学生にとって、当時の最大の出来事・関心事であり、生活の大部分に影響を与えていたことだから当然といえば当然である。いわば非日常が日常化している状態の中にあって、一方、普段の何気ない生活のひとこまがどのようなものであったかということについて、評者のような若い世代の者には関心がある。その記述が少ないことは惜しい点であった。また、旧制福岡高等学校時代に比べて、戦後になってくると、教職員の授業に対する学生側の記述・回想が激減するという傾向も見られる。教職員自身の側からすれば、自らの講義に関して、回想や評価することはしにくいだろう。教職員の証言や寄稿にその点が見られないことは当然といえる。その意味で、どのような科目が当時開講されていたのか、学生側の反応はどのようなものであったのかといった点について、戦後以降、ほとんど記載が見られないことは残念である。講義のみならず、教職員そのものへの学生の関わり方が変化していることが、この傾向に看取できるように思われる。教職員側の個性の問題もあるかもしれない。

ところで、本書では、キャンパス内にあった福岡高等学校、第一分校時代の寮や田島の寮生活については記述が詳しい。一方、「下宿は浪人谷の方にたくさんあった」(16)、「九大のヨコから谷まで」「下宿の経営者と学生、親子みたいな関係」(413)とまで描かれた一般学生の下宿屋については、まことに記述が薄い。六本松の周辺と学生たちとの関係を語る時、出入りの業者もさることながら、下宿屋への聞き取りも不可欠であっただろう。学生たちの生活、そしてその変化について語るべき「父や母」は「学裏」である谷地区や輝国地区に少なからず現存する。また、大学の東にある「栄ちゃん」や陸軍墓地下の「ほろ酔」(廃業)など、六本松の生き字引である名物おかみたちの証言も是非加えてほしかった思いが残る。大学周辺にいくつかある質屋も学生たちとの因縁浅からぬ関係にあったはずだ。その意味では、本書でいうところの「大学があった六本松という町」(398以降)の内実は、いささか北(正面)部分に偏重されすぎて描かれている。正面には正面の、学裏には学裏の関わり方があった。

ところで、膨大かつ内容的に充実したインタビューを成功させるためには、話者の選択や発言の誘引に高い技術が

必要となる。その点、編者の服部英雄氏は巧みである。本書の内容がここまで幅広い話題に及んだ功績は、情報を引き出すインタビュアーの力量に負うところも大きい。その他のインタビュアーも少なからず健闘している。但し、その点を評価した上で、記録を整理する際、いささか気になる点がある。

まず、話者の証言を読む際、体言止めが多いことに気づかされる。これは服部氏がインタビューした話者たちの記録部分に集中している。したがって、証言中の体言止めの多さは、実際の話者の表現そのものではなく、服部氏が情報を整理する際の「書き癖」であると考えてまず間違いはない。中には、方言が頻出し、人となりや語り口を彷彿とさせる記録もあるのだが(412)、押し並べて体言止めが多く、どの話者のインタビューを読んでも、あまり語り口の差を感じさせない。もとより、聞き取られた内容はそれぞれ全く異なる。とはいえ、記録化される際の表現が一様なため、読者としては、それぞれの人となりの微妙な差異を読み取りにくくなってしまっている。本書においては、とりわけ個性豊かな人々のインタビューに成功しているだけに、これは大変惜しまれることであった。

一方、話者の発言とインタビュアーの発言とがあまり分離されておらず、読み手として、「今読んでいる文章は誰の発言なのだろうか」と戸惑う部分も少なくない。文頭のラインや改行・空白などでインタビュアーの発言を他と明確に区別している部分もあるが、体裁はバラバラで統一性はない。また地の文章としてそのまま続いてしまい、両者の発言、ましてや編者による解説が混在しているものもある(79・138・162)。話者の発言に歴史資料としての厳密性をもたせようとするならば、少なくとも話者の発言とインタビュアーの発言とを明確に分離した表現や記載法にもっと注意深くあるべきであったろう。せっかくよい内容が聞き取りできているにも拘らず、記録化する作業の段階で、地の文章の中に、話者の発言とインタビュアーによる解釈、そして感想までもが混在する例が散見され、著しく読みにくかった(426・427)。証言の資料化という意味では、技術的に未熟な面がある。

加えて、本書の趣旨とは直接関係ない、話者とインタビュアーの私的な関係が唐突に記載されている部分がある(53・139)、大多数の読者には全く関係ないことであり、付会であったろう。

ところで、本書は「あとがき」によると、「正史と野史の中間叙述」を構想したとある(487)。但し、本書を通読すると明らかなように、野史偏重である。しかし、その野史偏重の叙述こそが、折々の場面を豊かに活写することにいかに成功しているかは明白であろう。本書の節々に挿入された正史部分の叙述は、確かに過不足なく整ったものであることに違いはない。しかし、生々しい証言や寄稿によって彩られた部分にこそ、かえって事態の本質が見事に表現され

〇〇〇 書評

ているように感じる。同じ現象を別々の人たちが、そして異なる立場・視点から心を込めて描いたからこそ、輪郭が明確になる。形が膨らむ。正史としての解説が仮に稀薄であったとしても、多くの証言を読み、複眼的な視野を獲得することで、読者は自ら輪郭を描きやすいのである。その点、本書を通読し、正史部分の総括ともいえる「六本松キャンパス概略史」(463)や、冒頭に立ち返って「旧制福岡高等学校と新制九州大学教養部」(2)を読む時、それまでの豊かな証言の数々に比べて、正史部分の生真面目な叙述がいかにもひ弱で白けたものに見えてしまう。もとより重要で欠くべからざる概説・総括であることには違いないのだが、本書を貫く証言の重みと寄稿の筆力が、それらを遥かに凌駕してしまっている。歴史を叙述するとはどういうことなのか、人々の心を打ち長く記憶に留める記録とは何なのか。「正史と野史の中間叙述」という形式は問いかけを絶やさない。

さて、九州大学六本松キャンパスは、すでに多くの校舎が解体された。構内にある思い出深い樹木の多くは伐採されたが、一部の特徴的な樹木については植え替えられ保存されることになっている。但し、もう六本松に福高や九州

大学の校舎はない。学生や職員たちが行き交う姿もない。学生相手の食堂や下宿屋・古書店も少なからず廃業した。「学生のいる街」を差し引いた形で六本松は出直しつつある。その意味で、「六本松の福高」「六本松の九大」の面影はより一層、この本の中に綴じ込まれようとしている。厳しさや激しさ、楽しさや喜びを含みこんだ青春群像の残影は、今や傾きかけた柔らかな光を受けて、活字に映る。せめて四つ葉のクローバーだけでも、六本松に残らぬものであろうか。

(九州大学さようなら六本松誌編集委員会編

2009年2月10日 B5判 489頁 定価2800円 花書院)

【附 記】

なお本書は、2011年3月現在、品切れ中である。しかし、以下にアクセスすれば閲覧することができる。正誤表も付されている。

<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/17867>

また、本書については他に、桑尾光太郎氏による紹介もある(『史学雑誌』119-11号、2010年11月)。併読されたい。



亦楽齋の裏から本館方向(2011年2月25日東南通用門より、筆者撮影)
(画像左：構内にあった特徴的な樹木が一時移植されている)



解体工事直前の六本松キャンパス(2010年11月21日浪人谷より、筆者撮影)



解体工事も終わりに近づく(2011年2月26日浪人谷より、筆者撮影)



解体工事直前の本館(2010年11月21日、筆者撮影)



解体工事が進む本館(2011年2月25日、筆者撮影)
(交差点・信号横にある「六本松九大前」の補助標識はいまだ残る)

社会人大学院生として

永 嶋 洋 一

(比較社会文化学府修士1年)

みなさん、はじめまして。今年の4月に比較社会文化学府に入学しました修士課程1年の永嶋洋一と申します。専攻は日本語教育です。指導教員である松永典子先生のご指導の下、勉学に励んでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

この原稿のテーマは「社会人大学院生として」なのですが、実は私は社会人受験して大学院に入ったわけではありません。社会人の経験は3年ほどありますが、その仕事を辞めてから中国に留学し、その留学を終えた後、入学しました。ちなみに大学時代(九州大学経済学部)に所属しておりました)は1年間、韓国にも留学していました。自分の中では社会人大学院生というよりは、留学人大学院生というほうが正しいかもしれません。

さて、私が所属する比較社会文化学府ですが、比文は日本人学生より留学生が多いため、日本にいながら留学している感じがします。つまり留学マニアである私にとっては最高の環境であると言えます。特に中国の留学生、韓国の留学生には仲良くしてもらっています。彼らは私が中国語や韓国語であいさつすると、必ず笑顔で返してくれます。そして私の下手な中国語と韓国語を必ず褒めてくれます。そんな温かい留学生の友人に囲まれて過ごしているうちに、ふと気づいたことがあります。それは留学生と同じ悩みです。実は日本人の友達ができないんです。ある日本人の友人からはこんなことを言われました。

「永嶋さんって留学生と話してるときはすごくうれしそうなのに、日本人と話すときはすごく緊張してますよね？」

・・・そのとおりです。日本人と話すときは、すごく緊張してしまうのです。もちろん昔からそうだったわけではありません。韓国や中国に留学してからその症状が出始めたような気がします。そして比文に入学してからさらにその傾向が強くなった気がします。しかし、それはつまり日本や日本人を客観的に見る視点が備わったということではないだろうかとも思います。これを今後自分の論文にも活かすことができればいいなとは思っているのですが、果たして上手くいくかどうかはわかりません。論文は別として、本当に日本人の友達つくりたいので、これから日本人のみさんも仲良くしていただければ幸いです。

さて、私の専攻は日本語教育なのですが、前期に松永先生の「日本語教育実践演習」という授業を受けました。その授業では、実際に日本語学校にお邪魔しまして、日本語学

校の学生に授業する機会がありました。2コマ計100分の授業を担当することになりまして、受身表現を教えることになったのですが…結局大失敗に終わりました。

失敗した原因は道具に頼り過ぎたという点に尽きます。前の日の晩まで黒板に貼るカード作りに終わってしまったのです。なぜそんなに道具に頼りすぎてしまったのか、今となってはもうどうにもならないことですが、おそらく自分に自信がなかったのでしょう。しかし、実際の授業では必死で作ったカードを有効に使うことができず、なにがどこにあるのか分からない状態になり、紛失してしまったり(やはり助詞のカードは小さすぎました)磁力が足りず、傾いたり…。当日に撮ったビデオを見て感じたのですが、自分の授業はまるでコントのようでした。ひたすらボケで、誰もツッコんでくれません。学生も失笑していたことでしょう。野球に例えるならば、高校球児がいくらイチローのバットを使っても200本ヒットを打てるわけがないということです。私は中学生レベル以下かもしれませんが。しかもそのバットはイチロー級でもなんでもなく、ただのプラスチックバットだったのかもしれませんが。やはりバットを磨く前に自分を磨くべきでした。

日本語学校の学生たちには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、授業終了後、ある学生から「先生、次はいつ来るの?」と聞かれ、「今日が最初で最後の授業だよ」と言ったら、その学生は「寂しいなあ」とポツリつぶやきました。そして「必ず日本語の先生になって下さい」と応援の言葉をかけてもらいました。実習は失敗したけれど、優しい学生たちのおかげで励まされました。次こそは学生のためになる授業をしなくてはと強く感じました。野球に例えるならば、今回は1回持たずにKOされた形になりましたが、次回はせめて5回2失点、いや6回3失点くらいで先発投手として最低限の役割を果たしたいです。そしてもちろん自分の勝ち負けは関係なしにチーム、つまり日本語学校の学生みんなのためになれたらいいなと思います。

さて、いまさらですが、社会人時代のことについて少しお話したいと思います。私が働いていたのは、福岡県内の、とある特殊な会社だったのですが、この会社はなかなか厳しいところでした。上下関係が厳しく、精神的にも体力的にもすごく鍛えられました。特に精神力も体力もまったくない私にとっては一種の人格矯正の場となりました。

なぜ会社を辞めたのかといいますが、常々自分には合っ

ていない仕事だと感じてはいましたが、これが続けるといつか自分が潰れてしまうのではないかと感じたからです。また、もし潰れなかったとしても、この仕事を一生続けたとして一体自分に何が残るのだろう、何が残せるのだろうと考えたとき、何も残らないような気がしたからです。それよりはもっと自分の能力を活かせる仕事に就いた方がいいのではないかと考え、一大決心して辞めることにしました。

しかし社会人時代に出会った人たちのことを今でも忘れることができません。私のまわりには幸いにも素晴らしい人が数多くいましたので、ダメな自分を支えてくれた人たちに対していまでも感謝の気持ちでいっぱいです。また厳しい環境の中で送った3年半という時間は、私に大きな自信を与えてくれました。困難にぶつかっても、あのとき乗り越えたのだから大丈夫だと思える自分がいます。そして会社を辞めることに同意してくれた両親に心から感謝しています。両親の同意がなければ、辞めることはなかったかもしれません。

会社を辞めたことに関しては、まったく後悔していません。会社で働いていたころの自分と、いまの自分はまるで違った人物のようでもあります。でも今でもときどき思い出します。あんなに嫌だった勤務日も、いま思い出すと楽しい思い出になってるから不思議なものです。

会社を辞めたことでももちろん失ったものもあると思います。給料はもちろんのこと、社会的地位もそうですし、会社で得られたであろう経験、出会い。しかし、それらを考えてみても私にとっては会社を辞めた後の経験の方がずっと大きな財産になっていると自信を持って言えます。50日間かけてまわった東日本一周旅行。1年間の北京留学。自分の人生であんなに楽しかった一年はありませんでした。韓国語以外にもうひとつ中国語を習得できたことは、いまの私にとって大きな自信になっていますし、これからもっと活かせることのできる大きな武器だと思います。例えるなら、韓国語が長刀であれば、いまの中国語の実力は短刀レベルですが、これからは比文の中国人留学生と中国語で話したりしながら、いつか名刀にすることができればいいと思います。

さて、長々とつまらない文章を書いてしまいましたが、最後にこれからの自分の目標を挙げて終わりにしたいと思います。

最初の目標は、来年中国の東北師範大学に留学し、自分の研究成果を出すということです。今の段階で、研究の成果はまったく出ていない状況ですが、中国での資料収集、及びインタビュー調査を行って、人生初の論文をいいものに仕上げたいと意気込んでいます。そのためには留学前にしっかりと準備が必要です。私が尊敬する大リーグ・マリナーズのイチロー選手も試合前の準備を決して怠らない人です。だから10年連続200本安打というとてもすごい大記録を打ち立てることができたのだと思います。イ

チロー選手を見習って自分自身も10年連続とはいかないまでも、せめて来年だけでも200本、いえ、100本でもいいから結果を残したいと考えています。

2つ目の目標ですが、九州大学の日本人学生と留学生の交流を活発にしたいです。九州大学は全国有数の留学生数を誇っており、比文にも個性豊かな留学生が多く在籍しています。しかし、他の留学生にも言えることですが、彼らと日本人学生との交流が少ないと感じます。せっかく日本語を勉強して日本に留学して来たのに、日本人の友達が少ないのは残念でなりません。そこで、九大の国際交流を活発化させるために国際部の協賛で留学生向けに日本のことを教える授業を、学部生向けに中国、韓国のことを知ってもらう授業を立ち上げました。まだ計画段階ですが、ぜひこれを実行し、成功させて、お互いの国のことを知ってもらいたいと思います。そして授業の最後には交流会を行いたいと考えています。

私自身、中国、韓国留学中には、交流会に参加して、数多くの中国、韓国の友達をつくることができました。九大の学生もぜひこの授業をひとつのきっかけとして、中国、韓国に興味を持ってもらえればいいと思います。その結果、私のように中国、韓国に留学する学生がひとりでも多く現れれば幸いです。

そして最後の目標ですが、やはり自分自身の人間的な成長にしたいと思います。大学院に入ってからすでに半年以上経ちますが、いろいろな面でまだまだ未熟な点が多すぎると感じています。自分に失望しないように、これから努力して行かなければなりません。自分でもかっこいいと思える人間を目指してこれから日々精進していきたいと思っています。



(2008年6月に韓国を訪問した際の写真)

職場と大学とフィールドと。

吉 村 和 昭

(日本社会文化専攻)

私は現在博士後期課程2年(2009年秋入学)です。勤務先は奈良県立橿原考古学研究所といい、その名が示す通り、奈良県にある考古学の調査研究機関です。したがって、私は社会人学生であると同時に遠距離通学者でもあります。大学への通学は平均すると1月半に一度で、あとはメールでのやりとりです。また、研究のフィールドが南九州(宮崎・鹿児島)であるため、そちらへも資料調査にやはり同じ割合で行きます。時には奈良と福岡と宮崎のトライアングルを順に移動することもあります。

大学卒業後20年以上、発掘調査や博物館学芸といった日常業務のかたわら、古墳時代の甲冑を中心とした武器、古墳時代の南九州にみられる地下式横穴墓に関する研究をおこない、近年はとくに後者に力を注いできました。

しかしながら、自分の研究、論文があまりにもモノ中心の古色蒼然としたつまらないものに思え、常々行き詰まりを感じていました。考古遺物の背後にある人間や社会を追求する研究を指向しながらも、それを進めていく上での理論、方法論の必要性を痛感せざるを得ませんでした。そのことが私に大学院での学びなおしを決意させました。進学先にわざわざ遠隔地の九州大学を選んだのは、基層構造講座に考古学理論、国家形成論、親族構造論、墓地分析の分野で学会をリードする先生方が揃い、研究テーマである地下式横穴墓、さらにはそれらを築造した社会の研究をすすめる上で、最良の場所と考えたからです。

入学当初、九大大学院に入ったこと自体に「有頂天」でした。しかし、甘い気分はすぐに霧消しました。人文科学研究院考古学専攻と合同の総合演習において博士論文の計画概要を発表した際、大学院生、研究員、7人の先生方に、あらゆる角度からの質問・批判を受け、防戦一方となりました。当初案を完全に練り直したことは言うまでもありません。40代半ばを過ぎた研究者が厳しい批判、トレーニングを受ける機会はそうありません。批判によって、自らの研究を見直し、補強していけるのですから、こんなありがたいことはありません。今でも総合演習の発表は強い緊張をともないますが、同時に心地よさも感じています。

毎回の出席は叶いませんが、演習や講義はもちろん貴重な時間です。研究室の院生諸氏との交流もまた大切です。優秀な彼らとの議論は楽しく、教えられること、研究に新たな示唆を受けることが少なくありません。

先生方から直接受ける論文指導は、進学の良さをもっと

も実感させてくれます。地下式横穴墓が営まれる墓地総体の分析をおこなった際、刊行された報告書だけでなく、写真や実測図などの調査記録にさかのぼった精査が不可欠であること、墓群をどのような単位で捉えるべきかなど、様々なご指摘、ご助言を受けました。実際、それらを踏まえて再検討すると、それまで見えなかったことが浮かび上がる。同時に、自分では判断できない被葬者の埋葬状態、順位、片付けなどの分析・解釈の問題に突き当たりました。この解決のため、世話人教員の田中良之先生は調査諸記録の検討にわざわざ宮崎へ御一緒してくださり、被葬者人骨の問題を整理することができました。この調査により私自身はその分析手法を習得することができ、さらにここでの成果はすぐに九州考古学会での発表へとつながりました。もちろん研究途上ですが、これまでなされてこなかった地下式横穴墓を築造する集団の親族構造研究を進めていく糸口を見いだすことができたと感じています。

今、私はこれ以上望めない研究環境にあることを実感しています。上述のような展開はここへ来なければできなかったことです。純粋な学生としてここに身を置きたかったとの思いもありますが、今までの経験と蓄積は必要だったと思います。ここにいるタイミングは今しかなかったのです。博士論文にむけて解決すべき課題は山積しています。過ぎゆく時間の速さに焦りを覚えますが、職場と大学、フィールドを往き来しつつ、迅速かつ着実にクリアしていきたいと思っています。



現場の風景：平城京発掘調査(写真撮影中)

「考古学徒、ふたたび」

栞 畑 光 博

(日本社会文化専攻 基層構造講座)

私は、昭和62年から宮崎県内のある市の教育委員会において、行政的には埋蔵文化財の保護、つまり考古学に関わる業務を担当しています。ただし、現在に至るまでずっと同じ業務だったのではなく、平成18年1月の市町村合併（いわゆる平成の大合併）に伴い、同年7月から2年間ほど、それまでとはまったく違う担当業務へと異動になったことがありました。異動当時は慣れない仕事と環境に加え、これまで別々に存在し機能していた自治体が合併したことによる混乱の渦の中、調整や協議に取り紛れながらの毎日でした。そのような中で、行政内外の周囲から、これまでもときどき耳にしていたことではありましたが、埋蔵文化財の業務は、「あまり私たちの現在の生活とは関係のない仕事」とか、「浮世離れした仕事」などと言われることがたびたびあり、確かに離れた位置から埋蔵文化財行政をみると、私たちの日常生活とはほとんど関係ない世界に自分自身がいたのかというギャップに戸惑いながら、あらためてこれが現実なのだということを痛感していました。

ふとそんなとき、外に向かうベクトルとはまったく逆方向の意識だったのですが、これまで自身が取り組んできた考古学というものをふたたび見つめなおしてみようという気持ちが強くなり、比較社会文化学府への進学を決意したのです（もちろん、自身の決意だけで動いたのではなく、その背景には家族、身内の支えや職場の理解もありましたが…）。そこで、20年前の学生のときからあたためていた研究テーマをもう一度深く掘り下げてみようと思いました。

また、常日頃、曖昧模糊として自分自身結論を出せないでいた部分について時間をかけて考えなおす機会を積極的に作ろうと考えました。

ところで、遺跡の発掘調査をはじめとする埋蔵文化財にかかわる業務（この仕事に限らず、どの仕事についても言えることだと思いますが…）は、まず体力、そして気力を維持し続けることが大切です。先述したように過去のことを扱う考古学が実生活から距離があるからこそかもしれないですが、そういった意味でモチベーションを維持するための何らかの仕掛けや手段が必要ではないかと思います。私の場合、比較社会文化学府における学びの時間だけは考古学にどっぷりと浸かることで、前へと進むエネルギーを得ているような、あるいはひとつの気持ちの切り替えにつながっているような気がしています。

現在、私が比較社会文化学府で取り組んでいる研究テーマは、「火山噴火が狩猟採集社会に与えた影響」です。なかでも縄文時代早期（14C年代で今から約6300年前）に南九州でおこった鬼界カルデラの噴火による自然環境の変化と縄文人の適応を中心に研究を進めています。比較社会文化学府の考古学・人類学メニューの大きな枠組みで考えると、「環境と人類」というテーマに含まれると思います。この研究課題に関しては、これまでにいろいろな機会を通じて発表してきてはいたのですが、荒削りの部分が多く、資料の提示が不十分であったり、論理的な思考過程を経ていない点があったりしていましたので、進学した際には、論述のテク



イタリア、ポンペイ遺跡にて（海外派遣研修）



小学生対象の発掘調査見学会にて

○○○ 社会人院生コーナー

ニックを含め、指導教員の先生方とのやりとりの中で自分自身を鍛えていければと考えていました。実際の博士総合演習においては、基層構造講座だけでなく、比較基層文明講座、地域資料情報講座の多くの先生方をはじめ一緒に学んでいる院生の皆さんから、人文科学だけでなく自然科学的な分野も含めて、いろいろな視点・角度からの指導・助言を受けながら、発表のたびにたくさんの気付きを与えていただいていることに、いつも感謝しています。あらためて、物事をみる目は柔軟であるべきだということを意識させられ、その中で自身の研究の根幹に据えている部分を再確認しながら研究を進められることに意義を感じています。

私の扱っているテーマは、突発的な火山の噴火による災害という、列島の先史社会において特殊な事件かも知れませんが、その事件を通して、縄文人の行動特性、ひいては

狩猟採集社会の姿を違う角度から明らかにすることができるとは思っています。

また、考古学を通じて知ることができた過去の事象を取り扱いながら、考古学そのものの現代的意義を考えるという意味でもこの研究分野は有意ではないかと考えます。現在、宮崎県と鹿児島県境にある霧島火山群の新燃岳が噴火活動を活発化させています。同火山の東南麓で生活を営んでいる自身としては、家屋、周囲の道路、田畑に降り積もる火山灰を目の当たりにし、その対応と処理に追われながら、実体験として火山災害の真ただ中にいます。現実と研究とをリンクさせつつ、これからも寡黙な考古資料の声を聞きだす努力を惜しまずに、考古学と向き合っていこうと思う今日この頃です。

比較社会文化学府・華東師範大学合同シンポジウム 『日本と中国＜個人・社会・文化＞』を開催して

東 英 寿・阿 部 康 久

(アジア社会講座・地域構造講座)

2010年11月20日、比較社会文化学府と中国の華東師範大学との合同シンポジウム『日本と中国＜個人・社会・文化＞』が開催されました。

本シンポジウムは比文の院長裁量経費による支援を受け、華東師範大学から、比文の修了生でもある潘 世聖教授をはじめとして徐 敏民、高 寧、唐 権、陸 留弟（名前は発表順）の5名の先生方をお招きして開催したものです。当日は、比文側の教員4名、院生3名、修了生1名を含めて計13名の方が1人30分の持ち時間で発表し、終了時間を大幅に超過するほどの活発な議論が行われました。

シンポジウムでは、発表内容をもとに「近代文学」、「満州地域の日本語教育」、「翻訳と実践」、「遊女と茶の文化」の4つの部会に分かれて、報告と質疑応答を行いました。以下、各部会での発表者と題目及び司会者を記します。

1. 『近代文学』部会（司会 波瀾 剛）

鳥谷まゆみ（立命館大）：1920年代の中国「小品文」に関する一考察

秋吉 収：“詩人” 魯迅再考——李長之、馮至等の言説をめぐって

潘 世聖：「棄医従文」：事実なのか？ 虚構なのか？——「藤野先生」への解釈をめぐって

2. 『満州地域の日本語教育』部会（司会 松永 典子）

祝 利：「満州国」の多民族に対する日本語教育についての一考察——1939年に実施された満州国政府語学検定試験を中心に——

アンドリュウ・ホール：言葉への信仰——「満州国」で帝国傾向に逆らう——

徐 敏民：租借地「関東州」における日本語教育

3. 『翻訳と実践』部会（司会 施 光恒）

高 寧：引用の本質に関する一考察

森 敦嗣：近代化と翻訳の役割——近年の政治理論を手がかりに——

文 華：中国の経済教育における「素質」教育について
阿部康久：中国人留学生の帰国後の進路と日本留学の効果

4. 『遊女と茶の文化』部会（司会 長谷 千代子）

唐 権：遊女と清代中国社会

服部英雄：遊女と日本社会

陸 留弟：茶の芸道観から見た中日茶文化の違い



写真：シンポジウムの広報用ポスター

発表題目から分かるように、双方の発表者の研究テーマには関連するものも多く、実質的で意義のある活発な議論が行われました。今回のシンポジウムに参加された華東師範大学日本学部の陸 留弟学部長からは「5人もの教員を招待していただいた上に、九大からは、華東師範大学の教員の研究テーマに近い研究をしている教員・院生を発表者・司会者として揃えてくれ、中身のある議論ができたことに大変感謝しています」というお言葉をいただきました。

また本シンポジウムは、大学の社会への貢献を目的に、当日、開催されていた第63回九大祭の関連企画として一般にも公開しました。これらの広報活動もあり、当日の参加者数は45名、懇親会参加者も30名と当初の予想以上の人数になりました。討論だけでなく懇親会にも多くの方に参加していただき、大学院生もシンポジウムを通じて大きな刺

○○○ 学内レポート



写真：閉会式後の記念写真

激を得ることができたようでした。発表者および司会を務めて下さった先生方、その他、ご協力を下さった多方面の方々に心より御礼申し上げます。

華東師範大学は、「師範」という名称から教育系の単科大学と誤解されることが多いのですが、19の学部を有する総合大学で、中国の国家重点大学の一つに認定されています。比文は、これまで韓国の大学と部局間交流協定を結んで交流してきましたが、中国の大学とは交流協定を結んだことはなく、中国の有名大学であり、地理的にも福岡に近い上海にある華東師範大学は、交流先として最適の大学であると言えます。

シンポジウム終了後の懇親会では、比文の教員・院生と華東師範大学の先生方はお互いに打ち解け、大いに歓談し、今後の交流についても話しが及びました。今回のシンポジウムを契機として今後も継続的に交流を進めていくことで

一致し、来年度は服部先生と阿部が、華東師範大学の招聘教員として、1週間程度、同大学を訪問し交流することが決まりました。

今回、華東師範大学側の窓口になっていただいた潘 世聖さんは、1994年に鹿児島大学の大学院修士課程に入学されました。ちょうどその時、鹿児島大学に勤務していた筆者（東）は潘さんと知り合いましたが、最近は具体的に交流する機会がないままで、今回の交流で、久しぶりにお会いし、まさしく「朋有り、遠方より来たる、亦楽しからずや」（論語）を実感しました。

今回のシンポジウムを通して、多くの比文の教員や院生が華東師範大学の先生方と知り合いになりました。今後、上海や福岡での交流の際に、華東師範大学の先生方にお会いすると、きっと「久しぶりだねえ」と言って、前述した論語の気持ちを懐くに違いありません。

これからも様々な方面で華東師範大学と交流が続くことを希望しています。



写真：討論の模様

研究会「記憶と表象から読む東アジアの20世紀」のご紹介

木 下 直 子

(日本社会文化専攻)

記憶、表象、東アジア・・・これらのキーワードは、社会学を専攻し、戦時中の暴力の傷痕や戦後社会の様相を研究する私にとって、また周囲とともに学ぶ多くの院生たちにとって、切り離せない観点を提示しています。ここではこれらのキーワードを軸に社会学専攻の院生たちが中心になって立ち上げた、韓国ソウル大学社会学科との学術交流会である研究会についてご紹介します。

本研究会はその前身となった院生の自主企画である研究発表会を経て比文の公式行事となり、これまでに2回開催されました。私は立ち上げのときから関わっています。院生が主体的に動き、先生方のご協力を得て国際的な学術交流の場を一から作り上げる経験ができたことは、事務的なノウハウを培う意味でも勉強になりました。(事務的な仕事に多くの時間と労力を費やしてきたのは双方の大学のパイプ役となった金泰植さんですが。)

プレ研究会

事の始まりは2009年、比文の社会学専攻の金泰植さんが当時ソウル大社会学科に留学中であり、金さんの留学中にソウル大社会学科と比文がつながり、学術交流の場が持てないかという構想が浮かび上がったことにあります。

日韓の学生同士で率直な意見交換ができれば、非常に刺激的な場となるだろうと思われました。研究会として制度化すれば、継続的な学術交流が可能となり、日韓を中心とした東アジアをめぐる知を問い直し、再編成を試みる実践の場が形成できます。まずは九大比文の社会学専攻の数名が、ソウル大に行き、院生の前で発表できればうれしい、そんな思いがありました。

そういうわけで金さんがソウル大側に相談すると、幸い社会学科の先生方や院生のみなさんが関心を持ってくださいましたので、ソウル大社会学科と比文の直野ゼミとの院生交流会として2009年6月15日にソウル大で研究発表の場を持つことができました。なによりソウル大社会学科の学科長である鄭根植先生のご支援があってこそ実現できた場であったと改めて実感します。

このときの研究会は九大の社会学の院生4名のみが発表し、それに対しソウル大の院生がコメントを発表するというものでした。準備期間の短さにも関わらず、ソウル大には発表原稿と翻訳した要旨を掲載した冊子を作成していただき、さらに各発表者に対し一人ずつ院生がコメンテーター

を務めてくださり、短期間でコメントを、しかも日本語にして用意してくださっていたことには本当に頭が下がります。



プレ研究会

第一回研究会

先生方のご協力のもと晴れて公式行事となった本研究会は、「記憶と表象から読む東アジアの20世紀」という公式テーマを掲げ、参加者を社会学専攻の学生に限らない、開かれた場を提供できるようになりました。第一回目は九大が会場となり、2010年2月19日に伊都キャンパス、翌20日に西新プラザで開催となりました。

この第一回研究会は、比文側に歴史学の分野からの発表者があったこと、ソウル大側に社会学を足場に文学作品を扱う発表があったことなどが研究会の構成を豊かにし、領域横断的にテーマに関わっていく場が形成されたと思います。ホスト校としては発表者枠はできるだけソウル大側に確保したかったため、ソウル大が5名、比文の院生は2名の発表者となりました。それゆえ公募で幅広く発表者を募ることはできなかったのですが、当日は社会学や歴史学以外に文学や思想などの分野を専攻する比文院生数名、さらに箱崎の人間環境学府からも院生が研究発表を聴きにきてくれましたので、活気ある研究会となりました。

初日はソウル大の鄭根植教授の基調講演「韓国戦争の記憶と脱冷戦 韓国戦争写真集を中心に」も行われました。また初日の全ての研究発表の後、一日を振り返り、院生研究発表に対し比文から三隅先生や直野先生のコメントもなされたので、私たち院生は双方の大学の先生方から多くを学ぶことができました。

初日は朝から夕方まで研究発表、夜はビッグオレンジで

〇〇〇 海外レポート

懇親会、二日目は午前中に研究発表をしてお昼に終了しました。十分に密なスケジュールです。両日も院生同士の総合討論の時間を設けてあり、ほどよい緊張感が持続しました。



第一回研究会後の懇親会

第二回研究会

第二回は2010年7月9～10日にソウル大で開催されました。比文は社会学から2名、文学専攻の院生が3名発表者として参加し、三隅先生、直野先生、波瀾先生に同行していただきました。ソウル大からも鄭根植先生を始め社会学科の先生方にご参加いただくことができ、研究会が本格化しました。

9日は九大側が当日の朝出発する関係で午後からの開始となり、社会学を中心に4名の院生が研究発表を行いました。他大学の院生の参加もあり、刺激的な場であったといえます。

10日のプログラムは直野章子先生の講演「トラウマ記憶と主体——原爆生き残りの証言から」と、比文の文学専攻者を含む5名の院生発表でした。私自身、日頃研究指導を受けている直野先生のこうした発表を聴くのは案外珍しい機会です。概念整理の手がかりとなり、方法論の面からも勉強になりました。

それから文学専攻の院生の発表を集中的に聴けたことは、たとえば茶園梨加さんの発表「石牟礼道子『苦海浄土——わ

が水俣病』の改稿にみる聞き書きの問題」など、その発想や分析の深め方など社会学専攻の院生にとっても大変示唆に富むもので参考になりました。今後も多くの分野の学生が集まることで、より一層相互に学び合えると思います。

11日は2組に分かれてフィールドワークに行きました。一組は伝統的な風景が残っている北村という地域に、もう一組はサムスングループが運営する美術館 leeum に見学に行きました。どちらもソウル大院生が案内してくれて、一日中付き合ってくれる寛大さと歓待の精神に韓国文化の神髄に触れる思いがしました。



第二回研究会

研究会の今後

研究会を重ねる上ではやはり成果を出さなければなりません。第二回の研究会で全発表が終わった後、研究会のあり方をめぐり将来的な見通しを議論する中で、共同研究プロジェクトとしての方向性を固め、ゆくゆくは成果物を出版できればという話にもなりました。このような目標があると、ますますやりがいを感じます。

第三回は順番的には九大がホスト校になる予定です。詳細が決まり次第学内に掲示をしますが、分野を超えて、多くの院生が参加してくれることを期待しています。研究会には学会とはまた違う魅力があり、テーマに沿って議論を深めていけるという利点があります。積極的に関わってくれる人の参加を歓迎します。

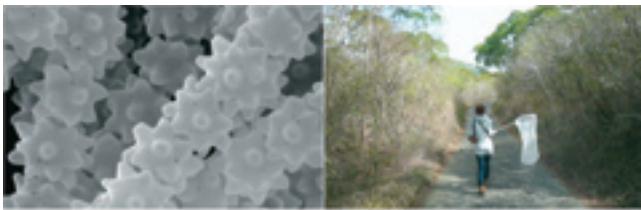
学振研究員としての研生活

橋 本 恵

(国際社会文化専攻/日本学術振興会特別研究員)

まさかこんなに虫と関わることになるなんて思ってもみませんでした。実のところ、私は虫が大の苦手で、子供のころは毛虫だらけの桜の木の下を歩くのが怖くてよく母におぶってもらっていたことを今でも覚えています。そんな虫嫌いなうえに無知な私は、何か生物を対象とした研究をやりたいという漠然とした動機で無謀にも虫一色の研究室に飛び込んでしまい、研究室はまさに大人版昆虫少年のような人たちばかり、しかも女性は私一人・・・実際本当にやっていけるのか不安でした。しかし、“昆虫”について知れば知るほど親しみを覚え、様々な戦略をもって一生懸命生きる姿に人としてのあり方を考えさせられることさえありました。そしていつの間にか比較社会文化学院に在籍して6年も経とうとしています。その間、平成21年度に特別研究員 DC 2として採用され、その後無事に博士学位を取得することができ現在は特別研究員 PDとして蝶の研究を続けています。

私は、熱帯林を主な生息地とするマダラチョウ類の一群であるコモンマダラ属 *Tirumala* の系統分類学的研究を行っています。この属は、特異な雄性器官をもつユニークな一群で、雄が後翅にあるポケットで“love dust”と呼ばれる雌を“その気にさせる”粉を生成しています。私はその雄性器官の芸術的で精巧な微細構造に魅了され、あらゆる部分をひたすら観察してきましたが、初めて電子顕微鏡でそれを見たときの感動、そして種によって形態が異なることを発見したときの興奮はいまだに忘れられません。私にとって“love dust”は、研究に対する意欲と幸運をもたらしてくれた“lucky dust”で、これがきっかけで今日学振研究員としての私があるのかもしれません。



(左：love dust 電子顕微鏡写真, 右：台湾調査にて)

たしかに白紙の学振申請書を埋めていくのには大変悩まされました。自分の研究で世界を変えてみせるくらいのイ

ンパクトがなければという学振説明会での担当の先生のアドバイスを真に受け、どうすれば自分の研究(=蝶)で世界を変えられるか真剣に考えたこともありました。のちに先輩にその話をすると、それまたでかいこと書いたねと笑われてしまいましたが、今となっては自分の研究とじっくり向き合うよい機会だったと思います。また研究以外でも、比文という多様な分野と国際的な特色をもつ環境柄、海外の研究者や海外をフィールドとする研究者との交流に恵まれ、文化的、社会的相違を理解しあうことの重要性を学ぶことができました。この経験は申請書を作成するうえで大変生かされましたし、それ以上に私自身のものの捉え方や感性に大きな影響を与えたと思います。

学振研究員となってからは、学生の頃よりもさらに自由にやりたいことに挑戦でき研究の幅が広がったような気がします。なんとなく自信もつき、遠く離れた海外の研究者とでも同じ目的をもつ者同士情報を共有し協力し合って研究を進めていけるようになり、研究にやりがいやおもしろさを感じるようになりました。結局今のところ私の研究で世界を変えることはできていませんが、私の世界は確実に変化しました。いつだったか私は他分野の研究者で尊敬するほど研究熱心な先輩に、研究ってそんなに楽しいものですか？と何気なく聞いたことがあります。即座に、だって世界がフィールドじゃんという答えが返ってきました。やっぱりすごいなと思える人は感じていることもレベルが違うな、と感心していましたが、研究を通じて国内外の研究者との繋がりを感じ始めた今、あの時の言葉が私にも少し共感できるような気がして自分も成長できたのかなとうれしく思うと同時に、これまで研究を続けてきて本当によかったと実感しています。

学振は私に研究者として成長するためのチャンスを十分なほど与えてくれました。今後も一人でも多くの方が採用され、私以上にチャンスに恵まれることを願っています。何より虫嫌いの私がここまで成長し、これほど順調に研生活を送ることができたのは、この比文という恵まれた環境と、私の可能性を信じて才能を伸ばして下さった矢田先生やつねに励まし支えて下さった研究室のみなさんのおかげです。心より感謝しています。

学振研究員としての研究生生活

四 條 知 恵

(日本社会文化専攻／日本学術振興会特別研究員)

平成22年度より、日本学術振興会特別研究員(DC1)として採用されるとともに、博士後期課程の1年生として研究生生活のスタートを切った。まだ研究は3年計画の1年目であり、目標地点には遠いけれども、もがきつつ目指しているという状況である。

「原爆の記憶の形成におけるキリスト教の影響」が私の研究テーマであり、これまで研究を通して、多くの方に出会う機会を得ることができた。社会人、修士時代も含め、アポを取って、インタビューをした方は、相当な数になる。しかし、全く面識のない人や機関に、研究という自分勝手な理由で「お話を聞かせてください!」と飛び込んで行くことには、何度繰り返しても、慣れない。未だに初めて連絡をする時は、逡巡する。忙しくされているかもしれない。また、会う機会はあるだろう…。今、連絡しない理由は、山のようにある。まさに、勇気をふりしぼって、である。

ある研究会に出席した折、同じく原爆をテーマに発表した方が、亡くなった被爆者に対して次のような発言をされた。「同じ長崎にしながら、なんで私は会いにいかなかったのか…。」その言葉に、はっとした。まるで、私が発言したように、感じたのである。同じ時、同じ場所に生きていたのに、なぜ、会いに行こうとしなかったのか。

実際、戦後60年以上の時が経過し、面識のない戦争体験者と会うのは大変である。まず、連絡先を得ることからして難しい。先月、広島市内にあるミッションスクールの戦時中の関係者にインタビューを行ったが、ご本人の連絡先を得るためには、複数の関係機関に問い合わせ、連絡先を探す必要があった。

始めに学校の同窓会に連絡したが、同窓会関係者の話では、ご本人が在籍されていたという記憶はあるが、卒業していないようなので、連絡先は把握していないとのことだった。次に、同窓会の紹介で大学の総務課に連絡し、旧職員の履歴書を見ていただいたが、何しろ戦時中のことで、記載内容も古く、現在のご遺族の連絡先についての情報は無いとの回答だった。そこで、学校付属の歴史資料館に連絡を取り、職員の記憶を頼りに、3年前に届いたご本人からのお礼状を探して頂き、そこから連絡先を知ることができ

た。個人情報公開の是非という壁もあるが、そこは何度も資料調査で資料館に足を運んでいたという経緯から得た信頼関係によって、クリアすることができた。なんとか連絡先を得ることはできたものの、既にご本人は相当の御高齢であることが予想される。3年前に礼状を出されているとはいえ、果たして今はご健在なのだろうか…。ドキドキしながら連絡をとった。

ご本人はご健在で、87歳の素敵なおばあさんだった。東京のご自宅まで、資料調査とインタビューに伺った。九州から突然やってきた大学院生を、温かく家に迎え入れ、長時間にわたって質問に答えてくださっただけでなく、色々と当時の資料を引っ張り出した上に、大切な資料を複数点貸してくださった。いい論文にしてくださいねという言葉に、「形になるのは何年も先で、時間がかかると思います…。」と答えると、笑いながら言われた。「何言ってるの。あなたなんか、時間なんていくらでもあるじゃあないの。」

本当にそうだ。90歳を迎えようとする人生の先輩から見れば、私なんてまだまだヒヨッチちゃんレベルである。彼女に比べれば、まだまだ幾らでも時間があるだろうにもかかわらず、ずっと短いスパンでしか物事を見ていなかった、と思った。

お借りした資料を返却する際、学校の歴史資料館の方が資料に興味をお持ちでしたと伝え、「全部寄贈してください」とのお返事だった。借用した資料の中には、被爆したミッションスクール関係者が昭和23年に渡米した際の日記があり、図らずも、資料館に寄贈する仲介役となることができた。

この数年で、何人もの被爆者の訃報を耳にした。それが私にとって大切な方の時もあった。今の私の研究があるのは、被爆者を始めとする多くの方々が、受け入れ、協力してくれたからである。そのことによって、失われていく多くの資料の中のごく一部を、後世に残す手伝いができると考えている。特別研究員となることで、さらに多くの方と出会うチャンスを得ることができた。私の人生の中のこの3年間に、研究に取り組む環境が与えられたことを感謝し、勇気を持って、新しい出会いに飛び込んで行きたい。

平成22年度修士論文（日本社会文化専攻）題目一覧

学位番号	学位の種類	(フリガナ) 氏 名	修 士 論 文 題 目
727	修士(比較社会文化)	イ 李 ジェ ハウ 載 學	「慰安婦」問題における民族主義に関する日韓のフェミニズム議論の考察 —民族主義を超え、被害女性の人権を中心とした議論のために—
728	修士(理 学)	オウ 王 ナ 娜	丸山 真男の中国観
729	修士(比較社会文化)	ラン ラン 蘭 蘭	田村俊子における女性像の変遷 —本格的文壇デビュー後の作品を中心に—
730	修士(比較社会文化)	アオ キ シ ホ ユ 青 木 志穂子	日本語「敬語」研究史におけるロドリゲス『日本大文典』の地位 —敬語と人称の関係性に着目して—
731	修士(比較社会文化)	ア タカ ノリ ヨ 安 高 紀 子	対話者とのやりとりの有無が発話に与える影響—対話・独話に関する比較—
732	修士(比較社会文化)	イ イ 伊 穎	20世紀初期モンゴル地域における日本語教育 —カラチン右旗ザサグ親王グンサンノルブの学堂を中心に—
733	修士(比較社会文化)	イ デ マ イ ヨ 井 手 麻衣子	細川藤孝関係史料の基礎的研究
734	修士(比較社会文化)	オウ ケン ハ 王 建 波	日本語と中国語のボライトネスの対照研究 —医療場面における自然会話を中心に—
735	修士(比較社会文化)	オウ ソウ 王 爽	中国の大学における「授受表現」の指導法の改善 —教科書の分析および学習者の習得状況から—
736	修士(比較社会文化)	オウ タン タン 王 丹 丹	日本語・中国語会話に見られる世代差の対照言語学的研究
737	修士(比較社会文化)	カキ ザキ タカ ヒロ 柿 崎 隆 宏	村上春樹初期三部作論—「個」であろうとする鼠を視座に—
738	修士(比較社会文化)	ギ ケイ キョク 魏 景 玉	中国大連市進出している日本市場向けコールセンターの立地要因に関する研究
739	修士(比較社会文化)	シュウ レイ レイ 周 麗 麗	中国のアニメ政策—文化産業の発展をめざして
740	修士(比較社会文化)	ソウ メイ ケツ 宋 明 杰	中国民営自動車企業におけるサプライヤー・システムに関する地理学的研究 吉利汽車を事例として

741	修士(比較社会文化)	タニ ザワ ア リ 谷 澤 亜 里	ガラス小玉からみた弥生時代後期社会の動態：西日本を中心に
742	修士(比較社会文化)	チン ヨウ 陳 陽	中国語自然会話に見られる依頼に対する「受諾」と「断り」行為の戦略
743	修士(比較社会文化)	トウ キョウ トウ 唐 旭 東	中国の地下鉄事業体の経営状況に関する研究：日本との比較を通じた考察
744	修士(比較社会文化)	トウ ヤマ マルミ 遠 山 真留美	生人形からみた幕末・明治の社会と文化
745	修士(比較社会文化)	ハーラ マハムード	異文化コミュニケーションにおける「ほめ」をめぐって —日本語とアラビア語の褒め方・解釈の違いに見る文化の影響—
746	修士(比較社会文化)	ハク シン キ 白 心 卉	日本占領期台湾における新劇研究—雑誌『風月報』・『南方』を中心に
747	修士(比較社会文化)	ハヤ カワ フカヨ 早 川 和賀子	瓦からみた国分寺造営—西海道南半を中心に—
748	修士(比較社会文化)	フル カワ チエ ミ 古 川 智 水	1990年代以降現代日本における「戦後」の意味 知識人の言論から
749	修士(比較社会文化)	マ キ 馬 驥	中国人学習者の日本語指示詞の習得状況に関する調査 —対話中の文脈指示を中心として—
750	修士(理 学)	ヨシ モト アヤ 吉 本 紋	黒瀬川構造帯に産する青色片岩の原岩形成場
751	修士(理 学)	ヨネ モト シ オリ 米 元 史 織	生活様式の復元における四肢の筋付着部発達パターン分析の有効性
752	修士(比較社会文化)	ヨネ ヤマ カオル 米 山 薫	談話展開におけるメタ言語表現の役割 —模擬就職面接場面を分析して—
753	修士(比較社会文化)	ライ イ シン 頼 怡 真	宮沢賢治文学における異なるもの
754	修士(比較社会文化)	リ カイ ショウ 李 海 礁	第一人称の省略現象における日本語と中国語の対照研究
755	修士(比較社会文化)	リ セツ 李 雪	日本語の自然会話に見られる女性語の丁寧さ —女性は男性より丁寧な言葉を使う理由—

756	修士(比較社会文化)	リ 李 タン 丹	視聴活動におけるFonFの可能性について —暗示的インプット強化の効果に注目して—
757	修士(比較社会文化)	リ 李 リョウ 凌	日本アニメ産業の中国市場進出の可能性に関する研究
758	修士(比較社会文化)	リョウ 劉 キン 金 ボウ 宝	太宰治文学と中国古典
759	修士(比較社会文化)	リン 林 ヒ 斐 チク 筑	日本のテレビドラマの視聴頻度と日本語学習意欲との関連性 —淡江大学日本語学科学生を例として—

国際社会文化専攻

学位番号	学位の種類	(フリガナ) 氏 名	修 士 論 文 題 目
760	修士(理 学)	イ 井 テ 手 タツ 竜 ヤ 也	Taxonomy of oak gall wasps(Hymenoptera:Cynipidae:Cynipini)inducing galls on the subgenus Cyclobalanopsis(Fagaceae)in Japan
761	修士(比較社会文化)	ウエ 上 ムラ 村 エリコ 絵里子	国際難民政策をめぐるUNHCRとEUの相互関係
762	修士(比較社会文化)	オ 呉 ソン 先 ジュ 珠	韓国語語尾「-다니」の研究 —主に韓国語教授法の観点から—
763	修士(比較社会文化)	キョウ 邱 ケン 娟	趙明誠『金石録』考
764	修士(比較社会文化)	サイ 西 リョウ 郷 アキ 明 ノリ 紀	議会事務局に関する考察—福岡市議会事務局の衆議院法制局派遣を中心に
765	修士(比較社会文化)	シバ 柴 サキ 崎 ユキ 行 オ 雄	日本語表現教育の現状—言語技術指導に注目して
766	修士(理 学)	タカ 高 ハン 橋 モリ 森 オ 生	新潟県糸魚川市産石筍の安定同位体比に記録された完新世の気候変動
767	修士(理 学)	チョウ 趙 ム 夢	深海堆積物コア試料の古地磁気記録にみられるミランコビッチサイクル
768	修士(理 学)	ド 土 イ 居 トモ 朋 タカ 嵩	Geographic variation of the wing-color patterns in female Papilio memnon thunbergii in Japan(Lepidoptera)

769	修士(比較社会文化)	ナカ ヤマ アイ 中 山 愛	移動描写の日英比較に関する考察—移動に伴う様態表現と経路表現に注目して—
770	修士(比較社会文化)	バク ホム 朴 範	都市観光地のテーマパーク化モデル研究 —韓国の竜頭山・ジャガルチ観光特区を事例として—
771	修士(理 学)	フル ヤマ セイ シ ロウ 古 山 精史朗	Chemostratigraphy and paleoceanography of the Ediacaran Doushantuo Formation in the western Yangtze Block, south China
772	修士(比較社会文化)	ホ ミン 許 寧	日韓における新たな地域連携に関する研究—福岡-釜山間地域連携を中心に—
773	修士(理 学)	マツ ザキ テツ ヤ 松 崎 哲 也	深海底コアから解読する過去50万年間における赤道湧昇帯の水塊構造変動史 —ナノ化石種量と窒素、炭素同位体比及び水銀含有量からのアプローチ—
774	修士(理 学)	ムラ イ ユウ ヨウ 村 井 悠 孔	Revisional study of the genus <i>Dorcus</i> (sensu Arrow,1950)based on the morphological characters of female genitalia(Coleoptera,Lucanidae)
775	修士(比較社会文化)	ヨシ タ ユウ ヨ 吉 田 祐 子	Dissent in Silence: The Historiography of Subaltern Silence and the Narrativity of Testimony in Arundhati Roy's <i>The God of Small Things</i> .



九州大学



比文・言文研究教育棟



伊都キャンパスセンターゾーン

広報情報化推進委員会よりおしらせ

クロスオーバーに寄稿された原稿の著作権は著者が有するものとする。ただし比較社会文化学府（広報・情報化推進委員会）は広報活動の一環としてそれら著作物をウェブサイト等で公開する権利を保有する。

（2010.10.08 第2回広報・情報化推進委員会決定、10.22 学府教授会報告）

編集後記

広報・情報化委員会では比文ホームページの充実を図りました。今年度は副委員長阿部康久先生、情報調査室藤澤裕子さん、修士一年西野貴裕さんのご尽力で、Pick upコーナー（教員インタビュー・学生インタビュー）の新設や動画Youtubeの導入もできました。画像は一階エントランスビジョンとほぼ同じものです。多数のみなさんに読んでいただける魅力的なホームページにしていきます。とりあげるべき話題、掲載すべきニュースなどがあれば、広報委員に連絡ください。またアーカイブスとしてCrossover、大学院案内などのQIRリポジトリ掲載をしました。Crossoverは<http://hdl.handle.net/2324/18923>です。Crossoverバックナンバー（No.1-28）のうち、No.9のみがみつからず、欠号になっています。お持ちの方はわたしどもにお知らせください。（服部）

比文の先生方、在学生や卒業生のみなさん、スタッフのみなさん、コロニー印刷さんのご尽力のおかげで、クロスオーバー第29号をお届けすることができました。大変ご多忙なみなさんに原稿の催促をするのは、編集者の仕事とはいえ、心苦しかったのですが、普段は知らずに過ごしている、同僚の先生方や在学生・卒業生のみなさんのご活躍を伝える貴重な場の作成に携われたことをうれしく思います。（直野）

SCSのロゴの説明



SCS（エス・シー・エス）は、九州大学大学院比較社会文化学府の英文名称 Graduate School of Social and Cultural Studies の略称です。ロゴはSCSを図案化したものです。考案者は「二羽の鴨に見える」と主張していますが、「一羽にしか見えない」と言う人もいます。しかし家鴨ではないという点では、私たちの意見は一致しています。裏庭の囲いのなかで餌をもらって外の世界を知らずにいる家鴨ではなく、越境する渡り鳥である鴨こそが、私たちのめざす新しい学府にふさわしいと考えているからです。

広報情報化委員会 クロスオーバー編集担当：服部英雄、直野章子



GRADUATE SCHOOL OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

発行者 九州大学大学院比較社会文化学府
発行年月 2011年 3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744

TEL : 092(802)5786・5787

FAX : 092(802)5785

ホームページ : <http://scs.kyushu-u.ac.jp/>